

＜住むこと＞を巡って

— Wordsworth, Rilke そして Heidegger —¹

江 崎 義 彦

We are dwellers, we are namers, we are lovers, we make homes
and search for our histories.

Seamus Heaney, *Preoccupations*

Die eigentliche Not des Wohnens beruht darin, daß die Sterblichen
das Wesen des Wohnens immer erst wieder suchen daß sie das
Wohnen erst lernen müssen.²

Heidegger, “Bauen Wohnen Denken”

序文

「地上ではすべてのものが不完全だ」とは、昔からドイツ人のきまり文句だ。だが、この神に見放されたものたちに、いつかだれかがこういってやればよいのだ。かれらのもとで、それほどまでにすべてが不完全なのは、かれらが、すべて純粹なもの、聖なるものを、不器用な手で汚さずにはいられないからなのだ。かれらのあいだに何者も栄え

¹ 本論は、2011 年度前期に西南学院大学より頂いた国内研究期間（4 月 - 9 月）における、ささやかな研究成果報告である。

² 「住むことの本来の欠乏は、死すべきものたちが、住むことの本質を、常に再び求めるのであり、彼らが住むことを初めて学ばなければならないということに起因する。Martin Heidegger, *Vorträge und Aufsätze*, 36 Heidegger に関しての書籍については、私の手許にある数少ないドイツ語原書と英語への翻訳書、そして優れた和訳の数冊を、便宜にまかせて使い分け、その都度、脚注にて言及する。

ないのは、彼等が栄えの根、神々しい自然を重んじないからだ。彼らの生活がいつも気が抜けたものであり、憂いに満ち、そして冷たい無言の不和で一杯なのは、人間の行為のうちに力と高潔さ、苦しみのうちに明朗さ、都市と家々のうちに愛と親しみをもたらす精霊を、彼等が軽んじているからだ。

・・・神々しい自然とその芸術家たちがこれほど侮辱されるころでは、生の最上の喜びはうせて、他のどんな星も地球よりましなものになってしまうのだ。そこでは、さすがに美しく生まれついた人たちも、いよいよひからびて荒廃してしまう。奴隷根性が頭をもたげ、それにつれて蛮風が、不安につれて陶酔が、はびこり、奢侈とともに飢えと食料の不足が増大し、年々の恵みは呪いに変わり、神々は逃げ去るのだ。

・・・心がじっと忍んで傷心の夜を耐え抜いたとき、一つの<新しい浄福>が開けてくる。闇夜に聞こえる小夜啼鳥の歌のように、深い苦しみのうちにはじめて、世界の生命の歌が神々しく響いてくるのだ。つまり私はいま、精霊と一緒にいるように、花咲く木々と一緒に生きるのだ。その木々の下を流れる清らかな小川は、神々の声のように、私の胸から悲しみを流した・・・

ヘルダーリン「断片：ヒュペーリオン」³

.....

ここに、やや長く引用した文章は 20 世紀最大の哲学者とも称される Heidegger (Martin: 1889-1976) によって<詩人の中の詩人 (the poet of the poets)>として規定され、常に彼の思索の中枢に存在していたドイツの詩人 Hölderlin (Friedrich: 1770-1843) の「断片：ヒュペーリオン」のなかの言葉である。この

³ 『ヘルダーリン全集<3>：ヒュペーリオン・エンペドクレス』188-89

深い憂いに満ちた、そして何よりも美しい文章（勿論その効果は、訳者氏の闊達な和訳にもよる）は、18世紀から19世紀初頭に、明け暮れる戦乱と産業革命などによる未曾有の＜近代化＞の波に揺らされて、＜住む＞ことの意味の再認識を余儀なくされた当時のドイツ知識人に共通した感情であったに違いない。そして、同じような時代背景の中に生きたイギリスのロマン派の詩人たちも、まったく似たような感情を共有していたことは間違いないとして、その言葉は21世紀初頭に生きる私たちすべてのこのころのなかに、それまでよりも遥かに痛切な響きとなって笈しているのは確かだろう。現代においては、Heideggerの言葉を俟たずとも、「私たちは真に＜住む＞というあり方をしていない、＜故郷喪失者（Heimatlos = homeless）＞」なのであり、暗黒の虚空にポカンと浮かんだ孤独な地球の上で、いよいよ深い＜根無し草（déraciné）＞（S. Weil）的存在となつては、＜故郷喪失＞という苦境を、ロケットなみの超高速で、刻々と、更に推し進めているからだ。

高度テクノロジーの時代、TVやコンピューターの支配する仮想現実の現代—私たちの視界は、宇宙の無限遠点にまで達し、そして世界の隅々にまで、限りなく拡大した。そして、あらゆる場所と空間との距離は益々縮小し、移動に要する時間も短くなるばかりだ。＜グローバル・ヴィリッジ（McLuhan）＞—それはそれでよし、としておこう。でも、しかし、＜近さ（die Nähe = nearness）＞は一向に近寄って来ない・・・

ここでもう一人、Heideggerの思索の礎^{いしずえ}となった詩人に、オーストリアの詩人 Rainer Maria Rilke (1875-1926)⁴がいる。かれは、そのようにして喪われつつある大地からの＜委託（Auftrag）＞の声を常に耳に聞いて、*Die Duineser*

⁴ 本論では、Rilkeの作品に関しては、断りがない限り、ドイツ語原文と英語への翻訳の Parallel-Text である、次のものを使用する。*Ahead of All Parting: The Selected Poetry and Prose of Rainer Maria Rilke*, edited and translated by Stephen Mitchell (以下 AAP) Rilkeの作品の和訳については、昔から優れたドイツ文学者たちの優れた先行訳があり、それらを参考にしながらも、原則として私の和訳で通す。

Elegien (『ドゥイーノの悲歌』、以下『悲歌』) の中で、次のように問うている。

Erde, ist es nicht dies, was du willst: unsichtbar
In uns erstehn? –Ist es dein Traum nicht,
einmal unsichtbar zu sein? –Erde, unsichtbar!
Was, wenn Vewandlung nicht, ist dein drängender Auftrag⁵?
Erde, du liebe, ich will. (「第9の悲歌」)

大地よ、お前が望むものは、まさにこれではないのか、目に見えず
我らのなかで立ちあがること？ いつの日か目に見えなくなることが
お前の夢ではないのか？ 大地よ、目に見えなくなることが。
もし転身でないとしたら、お前の緊急の委託とは何だろう？
大地よ、我が恋人よ、私は その委託を果たそう。

<大地>の願いは、我らのなかで<転身 (Verwandlung)>して、<目に見えなくなる<こと>、それが大地から詩人へと委ねられた<委託 (Auftrag = commission, command)>だと言う。それは、どのようなことなのか？ このような問を巡り、それに対する答えを探すが、本論のテーマになる筈だが、そのためには、私たちは、幾分かの回り道をしなければならないだろう。いずれにしても、<我が恋人>である大地が憂いの声をあげて、救いを求めているのは確実だ。また、別の箇所では Rilke は次のような感懐を漏らす。

事物たちはいま、詩人を求めて^{ひし}轟めきあっている、
まるで詩人を失いはせぬかと 怖れているかのようだ。
事物たちは 悩んでいる自分たちの顔を
孤独な人 語る人 裁く人にさし示す、—

⁵ この<委託 (Auftrag)>という言葉は、『悲歌』の第9巻に突然出現する言葉ではなく、冒頭の第一巻に出てくる言葉でもある。『悲歌』は全部で10の「悲歌」からなる詩であるが、この大地の<委託>を果たすことで締めくくられる。

詩人は 事物たちの仲間の一人であるからだ。⁶

世紀末の耽美主義そして象徴主義が、見失ってしまった＜もの＞と＜言葉＞の関係、同時代詩人 Hofmannsthal の「チャンドス卿の手紙」のなかで語られる言葉への不信感、また Sartre の『嘔吐』で披歴される、言葉に疎外される＜嘔吐＞の現場—いずれも、言葉が＜もの＞から遊離してしまい、言葉を失ったありふれた＜もの＞が不気味な怪物めいたいでたちで、目の前に立ちあがる姿が描写されている。見方を変えれば、＜もの＞を救済すべき詩人でさえ、合わせ鏡が張り巡らされた＜言語の牢獄 (Jameson)＞に幽閉されて、住むべき＜大地＞を喪失することの意に他ならない。Rilke の言う＜詩人を求めて犇めき合う＞＜事物＞の姿は、裏をかえせば、そのような事情が背景にあり、＜悩んでいる＞のは＜事物＞というよりも、大地喪失に立ち会う詩人の側なのだ。つまり、詩人の方が＜自然＞に対して、ある＜委託＞を委ねているのである。

Heidegger は、人間を＜存在の牧人 (Hirt = shepherd)＞と呼ぶ。西洋近代が見失ったもの、それは、＜大地＞を背後から支えてその本質を露わにさせていた＜存在 (Sein = Being)＞であり、それを見失うなかで、人間は、＜大地＞そのものをも失ってきた。そういう中で、人間は、存在の真理のなかへと投げ出され、その＜投げ出され＞のなかで、その存在の真理を損なわないよう、見守りながら、＜存在者 (Seiendes = beings)＞が存在者としてその本質を再び現出させるよう、庇護する存在である、ということであった。言うまでもなく、同時に人間自身を本来の姿に立ち返らせる意味でも、それはある。そのためには、常人よりも一歩だけ、ある種の危険に己が身を近づける人の存在が要請される。その先端に行く人が、Heidegger によれば、詩人たちである。Heidegger は、“The Question Concerning Technology” の中で、現代において、技術先導・支配（総駆り立て体制 = Gestell）の傾向は変えられないが、ギリシャ人が把握していた技術 (technē) の本質へと態度を＜転向 (Wendung)＞させ、ギリシア人のもとから届く声に耳を傾けることで、＜救いの力＞がもたらされるかもし

⁶ この詩のみは、塚越氏の和訳『創造の瞬間—リルケとブルースト—』27 に頼っている。

れないという趣旨の言葉を述べて、ささやかなる希望を述懐している⁷。その導きとなる声が、Hölderlin の詩行（英訳のまま）であった。

But where danger is, grows
The saving power also.

危険があるところ
救いの力もまた育つ。

詩人とは、上記の Hölderlin 詩に言及されている〈危険 (Gefahr)〉が住む〈深淵〉へと、恐らく人々よりも一歩先まで突き進んで、〈救いの力〉をそこから汲みとろうと試みた人々なのだ。従って、彼らは、Benjamin の言う〈破壊的性格 (the destructive character)〉の持ち主という性格を帯びてくる。自己を危険にさらしては、自己解体の危機に身を置きながらも、同時に、自然を一旦破壊せずにはおかないのだ。彼が語る〈破壊的性格〉とは、誰よりも先に、自然の〈委託〉に耳を傾けながら、解体=構築 (de-creation—S. Weil) を繰り返す人の謂いに他ならない。そうしなければ、自然の方が自ら解体を引き受けてしまうからだ。彼は言う。

The destructive character is always blithely at work. It is nature that dictates his tempo, indirectly at least, for he must forestall her. Otherwise she will take over the destruction herself.⁸ 「破壊的な性格は、いつも快活に仕事をしている。彼のテンポを指示しているのは〈自然〉である、少なくとも間接的には。というのは、彼は〈自然〉に先んじて処理しなければならないからだ。そうでなければ、〈自然〉はみずから破壊を引き受けるだろう。」

⁷ "The Question Concerning Technology" in *The Question Concerning Technology and Other Essays*, 34-35 (以下 QCT)

⁸ Benjamin, "The Destructive Character," *One-Way Street*, 157

同じ事情が、そっくり、Rilke より1世紀前のロマン派詩人たちをも襲っていた。18世紀の＜擬人法 (personification)＞、＜詩語 (poetic diction)＞、そして Jane Austen が方々で揶揄する Picturesque jargon などなど—それらは、Allegory として一括される＜もの＞と＜言葉＞の乖離現象であった (Benjamin → De Man)。言葉は＜衣装 (dress)＞であって、＜もの＞に理念的な衣服＜理念の衣 (Fusserl)＞をつけさせれば、それでことは足りたのだ、いわゆる＜言語衣裳観＞である。そこでは、＜衣裳＞のみが独り歩きをして、＜もの＞は消失してしまう。そして＜言葉＞のほうも、単なる＜道具＞であって、その役目を終えれば、どこかにもみ殻のごとく吹き飛んでしまうだろう。この事情を反省し批判しながら真の言語を回復するという姿勢で、イギリス・ロマン派の詩人 Wordsworth (William: 1770-1850) が *Lyrical Ballads* 「序文」(1800) で詳述しているのは周知の事実であって、ここでは繰り返さないが、従って、その Wordsworth とて上の Rilke の詩には同意を示していた筈だ。＜もの＞は詩人たちを求めて、犇めきあっている。私のほうも、自然に＜委託＞を託している・・・そのような、一種の相互依存を、Wordsworth は次のようにのべて、詩的営みの中枢に置き、次のように言う。

How exquisitely the individual Mind
.... to the external World
Is fitted; --and how exquisitely, too—
Theme this but little heard of among men—
The external World fitted to the Mind.

(Preface to the 1814 Edition of *The Excursion*: 63-68)

何と精妙に個々の心は
・・・ 外部世界に
適合しているか　そしてまた何と精妙に
(これは人々の間では殆ど聞かれていないテーマだが)
外部世界が　その心に適合しているか

そのようなことを、「私の声は宣言するのだ」と書いている。Wordsworth 的 <破壊的性格>は、外部と内部の<結婚>を願いながらの相互<委託>という形で、<外部>と<私>の中間地帯に、見慣れない第3のリアリティーとも言うべき世界を形成する。そのために、「人々の間で殆どきかれたことない」<危険>に己れの身を曝すのだ。これが、<存在の牧人>としての Wordsworth の仕事であって、同時にそこが、彼にとって<住む>べき場所となる。そこ以外に故郷はないであろう。

そして、以下、いずれもこのような自然の<委託>を受け取りながら、私たち現代の日常人と同じように、<住む>とはいかなることぞや、そして、真に<住む>とは何ぞや・・・そのような課題に<言葉>をもって生涯を賭けた二人の詩人、Rilke と、そして Wordsworth という詩人の詩の軌跡を辿り、そして詩人たちの言葉に謙虚に耳を傾けながら、彼らの背後から<住む>ことに関する哲学的な基盤を与えてくれた一人の哲学者 Heidegger を巡る覚え書きである。Heidegger は言う、「言葉は存在の家だ (Die Sprache ist das Haus des Seins.)」と。勿論彼にあっては、この<言葉>とは何よりも、詩人たちの発する詩的言語であることについては、贅言を要すまい。

I 世界の夜の時代

Rilke は、*Die Sonnete an Orpheus* (1923) [以下、*Orpheus*] のある個所で次のような感懐を述べている。

Selbst wenn sich der Bauer sorgt und handelt,
wo die Saat in Sommer sich verwandelt,
reicht er niemals hin. Die Erde *schenkt*. (*Orpheus*, I, XII)

農夫の仕事と苦勞すべてにもかかわらず
種子が緩やかに夏へと変身するところへは
達することは出来ない。大地が<授けてくれる>のだ。

農夫と大地は、深い信頼関係で結ばれており、穀物と限らずすべての＜もの＞が夏へと成熟するのは、両者の親密さ（＝近さ）を置いて他にないだろうと。そして申すまでもない、上の一節から逆照射されることは、大地（die Erde）が己れを閉ざしてしまって、＜授ける＞働きを止めてしまうことへの、詩人の深い危惧の念である。似たようなことを、彼よりも約百年前にイギリスの Wordsworth は、Rilke の＜大地＞と殆ど等価である＜自然（Nature）＞に関して、端的に次のように述べている。

The world is too much with us; late and soon,
Getting and spending, we lay waste our powers:
Little we see in Nature that is ours;
We have given our hearts away, a sordid boon!

世界は余りに厄介だ、遅くそして早く
獲得しては消費しながら、我らは己れの力を浪費している。
我らのものである自然のなかに、われらは殆ど何も見ないのだ。
我らは心を安売りしている、おぞましい賜物よ。

イギリスに話を限れば、18世紀末からヴィクトリア朝の都市世界へと加速度的に突っ走る、自由放任主義（laissez-faire）の消費社会（consumerism）のなかで、人間は＜自然＞を忘れて置き去りにし、大地との贈与関係は閉ざされてしまいつつあった。残るは、＜心を安売り＞したあげくの、人間と商品との＜おぞましい賜物＞関係が残るだけではないか。Wordsworth は Carlyle を先取りする形で、そのような社会状態を＜発明の時代（inventive age）＞と呼び、科学的な方法（method）⁹と機械（machine）¹⁰が人間を支配する＜悪しき＞傾向を確

⁹ ニーチェは、19世紀を＜方法（Method）＞の勝利の時代と規定する。Heidegger は、そのニーチェの考えを受け継ぐ。特に“The Word of Nietzsche: ‘God is Dead’”, *QCT*, 53-115

¹⁰ Pater は、＜機械時代＞に対して反抗する自然詩人 Wordsworth という見方で、次のよ

認し、警告の声を発する。Rilke そして哲学者 Heidegger の時代には、更にその情勢は加速度を増し、Rilke の詩文にはいたるところ、都市と機械への呪詛とも言える言葉が立ち並ぶ。初期の作品『マルテの手記』に集約される〈病める都市パリ〉の孤独世界に、数と量でのみ測られる〈誰の死でもない、平板な死 (Roland Barthes)〉をつぶさに見て、都市がいかに本来の自分を喪失させるのか、Rilke の〈本来の自己〉探求は、そのような〈影〉の場所を背景にして、そこから逆照射するという形で浮かびあがる。そして、『存在と時間 (Sein und Zeit)』における初期 Heidegger は、そのような〈世界〉に否応なく投げ込まれる、庇護なき〈世界内存在 (In-der-Welt-Sein)〉が、いかにしたら〈本来の自己〉に立ち返ることが出来るのか、それを究めることを主題としたのであった。

Heidegger は、Descartes に始まる西洋の近代世界を、主体が〈もの (Ding = thing)〉を対象として眼前に据え (これが〈表象 (Vor-stellung = 前に - 置く)〉の原義)、距離を置いた〈像 (Bild = picture)〉として据え置く時代、すなわち〈世界像の時代 (the age of the world picture)〉と規定するのだが、この〈像〉の前景化とともに、かつての深い陰影を持った奥行きのある世界は見失われ、自然が持っていた〈生命〉も瀕死の状態に陥ったのだった (18 世紀啓蒙主義・理神論の時代がその典型。〈もの〉は、〈もの - 性 (thing-ness)〉を失い、単なる〈対象 (object)〉になり下がってしまった)。そして、この〈像〉の世界は、ルネサンスの〈遠近法 (Perspective)〉の確立と並行現象的に生じたものであり、見る主体は、まさに全能の神の如き視力を持って、望遠鏡 (= 単眼) で視野を限り、幾何学的に、ピラミッド状に世界を構成するというものであったのだが、その結果も同じ事態を招き、近くにあるささやかなものや途中に存在する物体など—自然が持っている奥行き—を置き忘れてしまい、ひたすら消失点 (Plato のアイデアであれ、キリスト教の神であれ) を目指しては、この人間

うに語っている。“Against this predominance of machinery in our existence, Wordsworth’s poetry, like all great art and poetry, is a continual protest. Justify rather the end by the means, it seems to say: whatever may become of the fruit, make sure of the flowers and leaves.” (*Selected Writings of Walter Pater*, 138)

の住む＜大地＞を蔑ろにしてきたのであった。

それから、もう一つの、周知の Heidegger の近代の規定に神不在の＜欠乏の時代 (the destitute time)＞というのがある。無限遠点まで数学的に伸びる＜延長空間 (extension)＞ (Descartes) のなかで、かつての神々の住む場所 (これを Heidegger は＜エーテル界＞と呼ぶ) は放擲されてしまった。¹¹ ＜農夫＞が大地に信頼を寄せなければ、或いは、＜我ら＞が＜自然＞のなかに＜何も見なく＞なれば、自然は悠久の姿を保ち続けるかもしれないけれど、時には冷酷に人間を突き離し、また、時には最近の自然大災害におけるように＜想定外＞の暴力でもって、生き物を絶滅させるかもしれないのだ。そして、神々が安らうべき＜エーテル界＞は地上からは消滅してしまう。これが、古き良き＜村落共同体 (Gemeinschaft)＞が解体されながら、急激に近代化されて＜利益社会 (Gesellschaft)＞へと成長しては、＜脱 - 魔術化＞ (Entzauberung) (Weber)、言い換えれば、＜非世界化 (Entweltlichung)＞ (Heidegger) してゆくプロセスの本質なのである。

人間が安らかに＜住むこと＞が出来るのは、＜神々＞に庇護された意味での、Rilke の言う＜大地＞であり、Wordsworth の語る＜自然＞を於いて他にない。そのためには、大地を労わり、＜エーテル界＞を回復しなければならない。Rilke の言う＜本来的な農夫＞は、恐らく大地の恵みに感謝の気持ちと崇拜の念を抱き、古代人のようにそこに臨在する＜農耕神＞を感受するのであろうし、また、詩人たちは、そのような現場を目撃しては、＜言葉＞のなかに繋ぎとめ、そこで＜神々＞を新たに立ち上がらせるのだ。＜像の時代＞が無限にまで乖離させてしまった、＜もの＞と＜言葉＞は、そこで再び＜受肉 (incarnation)＞という

¹¹ Heidegger の診断にも耳を傾けよう。「現存在は、その都度、本質的なものがそこから人間へと到来し、かつ還ってくるようなあの深み (Tiefe) を持たない世界へと滑り込み始めた。あらゆる物は同じ一つの平面、もはや何かを写すこともせず、何物をも反射しない曇った鏡にも似た一つの平面へと落ち込んでしまった。延長と数という次元が優勢な次元となったのである。」 Cited in 大峯顕「聖と俗」282

形で、繋がり合うのではないか。Wordsworth が、自然により近くに住んでいる湖水地方の「田舎人」の日常の言葉を＜哲学的な言語＞と受け止めて、そのような素朴な言葉を自らの詩語の基盤となし、また、Heidegger が＜方言 (Mundart = dialect)＞の中にこそ、＜故郷＞が存在すると喝破したのは、そのことを語っている。

Im Dialekt wurzelt das Sprachwesen. In ihm wurzelt auch, wenn die Mundart die Sprache der Mutter ist, das Heimische des Zuhaus, die Heimat.¹²「dialect のうちに、言語の本質は根ざしている。Dialect のうちにはまた、方言が母の言語であるならば、住処の郷土的なもの、即ち故郷もねざしている。」

.....

Freud が告げるあるエピソードがある。古代ドイツで伝道し、“The Apostle of Germany” と称えられる聖職者 St. Boniface に関するそれである。

聖ボニファティウスは、ザクセン人たちが聖なる樹木と崇めていた木を切り倒した。これを見守っていた人々は、この冒瀆のために、恐るべき出来事が起こるだろうと固唾を呑んでいた。しかし、何事も起こらず、こうしてザクセン人たちはキリスト教に改宗したのだった。¹³

このような形で、ザクセン人にとって、キリスト教は樹木の殺害、そしてそこに住む神々の疾走ということを代償にして伝播していった。神々は消えうせ、痕跡だけが残った。18 世紀後半、湖水地方でも同じようなことが、Wordsworth によって報告される。しかし、今度は、神々が逃走せざるを得ないのは、産業革命＜＝機械＞技術の申し子、鉄道のためなのである。

¹² Heidegger, *Aus der Erfahrung des Denkens*, 156

¹³ 『幻想の未来 / 文化への不満』 83

自作農たちの多くが、自らの小さな遺産に対して感じている愛着の程度と種類は、評価してもしすぎることはない。彼らのうちの一人だが、その人の家の近くに、壮大な樹木が立っている。その木を、土地所有者の隣人が、利益を得るために、その木を切るよう、彼にアドバイスをした。「それを倒せとは」と、その自作農は叫んだ。「私は、むしろ、その木のまえに跪いて、崇拜したい気持ちだ。」多分、計画されている鉄道は、この小さな固有の土地をも通り抜けることだろう、と私は信じる。そして、このような力強い感情に支配される人々には、その答えに対するいかなる弁明も必要ないであろうと思うのである。¹⁴

そして、20 世紀の Rilke の嘆きをも聞いておこう。彼は、19 世紀の機械技術に支配される人間の営みを、「死の狩人」と呼んで、糾弾する。¹⁵

Manche, des Todes, entstand ruhig geordnet Regel,
weiterbezwingender Mensch, seit du im Jagen beharrst;
(*Orpheus*, II, 11)

絶えず征服を続けて行く人間よ、お前が飽くことなく猟をするようになって以来、多くの、死の、静かな秩序を持った法則が生まれた。

こうして、神々は去ってしまい、＜世界の夜の時代 (the time of the world's night)＞になってしまった。この＜欠乏の時代＞—この時代とは Heidegger にあっては、殆ど近代形而上学→近代技術 (technology) の世界と同義語であるが、この世界にあっては、＜聖なる輝き＞も消えうせ、もっと悪いことに、近代の人間は、それが＜消えうせた＞ことにさえ気づいていない。

¹⁴ William Wordsworth, *Guide to the Lakes*, 146

¹⁵ 「病める都市」「死の商人」など、勿論、イギリスでは Pound, Eliot, Lawrence, Woolf など、Modernists たち共通の時代認識であったことについては、贅言は要さない。

Not only have the gods and the god fled, but the divine radiance has become extinguished in the world's history It has already grown so destitute, it can no longer discern the default of God as a default.¹⁶
「神々と神が逃げ去っただけでなく、聖なる輝きも世界歴史のなかで、消えうせてしまった。・・・世界は余りに欠乏してしまったので、それはもはや、神の欠如を欠如として見分けることも出来ないのだ。」

これは Heidegger が Rilke 論の冒頭で診断する、周知の近 - 現代の診断書である。別の箇所で、彼はまた言う。

Das heutige technologische Weltalter kennzeichnet, das die Sensvergessenheit, ohne von ihr wissen, gleichsam als ihr Prinzip befolgt.¹⁷「今日のテクノロジーの世界時代は、〈存在忘却〉をそれと知ることなしに、いわば己れの原理として遵法している。」

ひょっとしたら、近代技術に依存する現代人は一様に、〈存在 (Sein)〉を忘却しては、〈神々の逃亡〉を助長するだけの一元的人間 (Marcuse)、技術的に支配された人間たちばかりであって、Rilke の謂う〈死の狩人〉、いわゆる〈死の商人〉になり下がっているのかもしれない。このような時代に救いはあるのか。その為には、すぐ目の前に横たわる、何気ない、ささやかな〈もの〉をもう一度見つめなおすことが要求される。

II 大地への眼差し

Rilke は、Wordsworth が殆ど至る個所で述べるのと同じように、〈小さきもの〉への愛着をこう語る。

¹⁶ Martin Heidegger, *Poetry, Language, Thought* (以下 *PLT*) 91

¹⁷ Heidegger, *Aus der Erfahrung des Denkens* 234

もしくもの (the thing) > が、きみが他のものに執着していることが分かれば、・・・それは、己れを閉ざしてしまう。それは確かにきみに友情のかすかな印しを、言葉と頷きでもって、きみに授けるかもしれないが、しかし、それは決してその心 (heart) を与えたり、その忍耐して待っている存在を与えたり、その甘い星座のような恒久性を授けたりはしないだろう。＜もの> がきみに語りかけるためには、しばしのあいだ、きみは、それを＜唯一の存在者 (the only one that exists) > として、そして＜一つのそして唯一の現象 (the one and only phenomenon) > と見なさなければならないのだ。そうすれば、きみの忍耐強い、排他的な＜愛 (love) > を通して、その＜もの> は、宇宙の中心に据え置かれることになるのだ。¹⁸

もし、＜もの> への＜愛> があれば、仮にそれが目前のスミレの花であれ、宇宙の中心者という位置に置かれ、それを中心にして、世界は動く。同時に、それを見る＜私> もその花と一体化しては、宇宙の中心に置かれることになるだろう。

先ほど言及した「技術論」のなかの結論部分で、Heidegger は、＜大地＞を救う方策を芸術＝詩に好み、確信をもって次のように提言している。

How can this (=saving) happen? *Here and now and in little things*, that we may foster the saving power in its increase.¹⁹ (強調は筆者)「救いはどのようにして生じるか。救いの力が増大しながらそれを養うためには、＜ここで>＜今>そして＜小さきもの>のなかで。」

「＜今>、＜ここ>、そして＜小さなもの>のなかに (救いの力は温存され、育

¹⁸ AAP, 563-4

¹⁹ QCT, 33

成されている)。・・・この三つの言葉は、一様な重みを持って働いている。〈今この瞬間〉、そしてこの〈場所〉で、そして〈小さなもの〉のなかに・・・これは、Heidegger ならずとも、Wordsworth と Rilke の中にも常住している倫理的な要請であり、彼らの実存の営みの基盤であり、また彼らの詩的経験の中核をなす「磁場」として働き続けている〈故郷〉への帰還の、まさにその現場だと言える。〈故郷〉とは、冒頭で私が引用した文章のなかで Hölderlin が語っているように、野原の〈花咲く木々〉やくその木々の下を流れる清らかな小川〉のそばにひっそりとして隠れているのかもしれない、つまり、余りに近くにあるがゆえに、人間から最も遠くにあるもののようだ。その逆も真なり。そういう意味で、〈帰郷〉とは、もといた場所に戻ることにほかならないけれど、そのために、目の前の〈小さきもの〉は、人間による救済を待っている。それが、ある〈神の閃光（辻邦夫）〉の如き靈感に打たれた瞬間、輝かしい煌めきを放ちながら、〈小さきもの〉は、相貌を変えながら本質を露わにしてくる。そこに〈郷愁〉を搔き立てながら、同時に〈未来〉への輝かしい予感に包まれたく故郷〉が生成してくる。〈帰郷〉とはく生成〉なのだ。一瞬だけの。言うまでもない、まさしくこれは Wordsworth が先鞭をつけた近代的“Epiphany”の構図²⁰ そのものではないか。例えば Wordsworth はその瞬間を、〈盾の煌めく〉瞬間として、以下のように語る。

..even then I felt

Gleams like the flashing of a shield. The earth

²⁰ See. Nichols, Ashton. *The Poetics of Epiphany: Nineteenth-Century Origins of the Modern Literary Moment*. また、Taylor, Charles の *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity* も参照。この書物では、Wordsworth などのロマン派詩人の試みが、Heidegger 的な言い回しで〈存在のエピファニー (the epiphany of being) と規定され、Pound などのモダニストにとっては、〈内空間のエピファニー (the epiphany of interspaces)〉と規定され、外部を遮断したうえで、テキスト空間での〈顕現〉が目指されるという。Rilke もそれに当たるだろうが、ロマン派とモダニズムはそういう形で連続体をなすというのが、彼の主張であることは忘れてはいけない。思うに、ロマン派の詩人たちにあっても、“the epiphany of interspaces” という側面は厳として存在する。テキストがテキストの表面で、何か〈立体的なもの〉を生成せしめるのだ。

And common face of nature spake to me
Rememberable things. (Prel. 1805, I: 614-17)

まさにそのような時 私は
盾の煌めきのような輝きを 感じた。 大地と
自然のありふれた＜顔＞は 私に語っていた
思い出せる事物を。

＜盾の煌めく＞一瞬、それは、恐らく詩人の目を眩ませては日常世界を変貌させながら、自己解体の危険にまで突き落とす瞬間なのかもしれないが、その瞬間にこそ、自然は＜過去＞のもろもろの事物を蘇らせて、それに新たな意味をまとわりつかせながら、輝かしい未来への予感を、私に抱かせる。

と、語りながら、今、私は批評界で取りざたされてきた Wordsworth の姿を思い浮かべる。湖水地方の環境保護を訴え、己れも腕利きの庭師ぶりを発揮しては、同時に土地人と親しく接する＜教師＞然とした彼にとって、では詩作と＜環境保護＞とはどのような形で連動していたのかという、そのような問である。「花鳥風月」を歌い、それを深い宗教意識や高い道徳感で染め上げるといった Victoria 朝が読みとった“the simple Wordsworth”という理解の上であれば、Ruskin や Morris へと連動する環境保護運動のその支柱とは、確実になりえたであろう。問題は、20 世紀 Wordsworth 批評が読みとった“the other Wordsworth”という側面のことである。言わずとしれた De Man や Hartman 以降の Post-Structuralists 達が読みとる＜異郷の (alien)、不思議な (strange)、不気味な (uncanny)＞Wordsworth 像—“the visionary Wordsworth”と呼んでおこう—のことであり、例えば *The Prelude* に見られる“the Spots of Time”が典型的に示すような不気味 (uncanny) とも呼べる自然、＜死＞をも突き付けてくるその様相の瞥見の現場が、環境保護とどのような繋がりを持つのかという問である。そのような問に対しては、恐らく、今は、以下のように答えるのが正解かもしれない。

18 世紀 Picturesque から National Trust そして現在へと至る環境保護運動

(environmentalism) の本質は、自然を人間の利益のために確保し改善し保護しながらも、時には自然が持っている尊厳をも歪めてしまうが如き人間中心主義 (anthropocentrism) >— Descartes 的な主 = 客の二元論構造のなかの <距離を置いた主体性> という <内部> での、悪しき円環を堂々巡りするだけになる = <人間のための自然>。それに対して、自然に対峙する Wordsworth の姿勢は、あくまでも自然界の大きな生命体 (土地霊や神) に畏怖の念を抱いては跪拝するがごとき、宗教的なそれであり、自然の個々の存在者の一つ一つに掛け替えない生命を認める、言ってみるならば東洋の禪者²¹ の姿勢—それを <生命中心主義 (biocentrism) と呼んでおこう—のそれに近いのだ。それであるがゆえに、自然は、Wordsworth にしばしば、Otto の言う <魅惑しながらも、戦慄させるヌミノゼ (das Numinöse)> 感情を突き付けてきては、生の転換を迫ってくるのだ。先ほど言及した Hölderlin 詩における <危険> な深淵とは、そのような場所のことなのであって、環境保護をいやしくも唱えるのであれば、そして、大地を <聖なる> ものにする為には、まずは、そのような危険の淵に我が身を置きながら、その現場でいわば「ゼウス神の雷光」に打たれてはじくと耐え抜き、見返す視線で振り返りざま、この大地に熱い眼差しを注ぐ <離れ業 (tour de force)> が要求されるだろう。

ここで、肝要なことは、その <危険> の淵では、世界が異質の性質を詩人に突き付けては、詩人にとって、世界の秘密めいたものが開示される (世界の地平拡大) ということであり、同時に、そうした <冒険> において、詩人自身が <私> の別の面 (私ならざる私) を意識させられては、<私> 自身の精神的な

²¹ 後に言及することになるが、初期の Wordsworth の心情は、その本質を禪的 = 俳句の世界に通底させている。Rilke に関しては、俳句 = 俳諧 [Hai-Kai] がいかに重きをなして存在していたか、また、Heidegger に於いても、東洋の世界からの響きがざわめいている。日本の手塚富雄氏との対話では、俳句や黒沢映画 (『羅生門』) への言及もあり、また、九鬼省三『いきの構造』を巡る対話も交わしている。Rilke が俳句によって開眼させられたことについては、星野慎一 / 小磯仁『人と思想：リルケ』及び、塚越氏の前掲書が詳述している。また、ソフィー・ジョーク宛ての手紙 (1925.11.26) では、Rilke は俳句を「短い驚き」と称して、29 編の俳諧を彼女に紹介している。『リルケ書簡集 III』254-65

地平が拡大するという、そのような事態が現出するということである。そうした行為の後にこそ、大地は＜聖なる＞ものという性質を新たに付与させられて誕生する筈だ。²²そして、そうした視線のもとで、大地を大地として、大地のまま発現させる必要がある—そして、それを言葉の中に住ませなければならぬ—これが前提条件となる姿勢であるだろう＜＝自然のための自然＞²³。＜素朴な (simple)＞な詩人は、同時に＜ヴィジョンを見る (visionary)＞側面と力量を持つがゆえに、＜素朴詩人＞として生成しうるのだ。²⁴ Heidegger にとって、本

²² Jonathan Bate が “eco-poetic” という概念でそれを名指すときに、それは、このような重層的な営みを言い当てている。ギリシャ語源を確実に保留しながら、現代的な意味に光を当てる言葉であり、“eco” = “oikos” (= “house”, “habitation”) という接頭語に、“poetic” = (“poiesis” = 創造、“poetics” = 詩学) を加えて、＜住まいの創造、住まいの詩学＞—＜詩的ロゴスが、住まいを建設する＞—そのような意味合いを持っている。 *The Song of the Earth*

²³ “Anthropocentrism” の欠陥について、最近唱えられるのが “biocentrism” に基づく “Deep Ecology” だ。その視点から、Ian Thompson は、21 世紀の私たちが Wordsworth を読む意義をつぎのように、熱く語りかける。Wordsworth is sometimes described, dismissively, as a “nature poet” but his poetry is about *the organic relationship between human beings and the natural world, a pressing theme for the twenty-first century*, when this relationship seems to be breaking down everywhere we look. (強調は筆者)。また、Heidegger が今、熱心に再評価される点もそこにある。Cf. Howe, Lawrence W., “Heidegger’s Discussion of ‘the thing’: A Theme for Deep Ecology”, 93-96

²⁴ 素朴詩人となりおおせぬまま、ついに永遠の＜故郷喪失＞に至る Coleridge の例を、T. S. Eliot の＜診断書＞付きで瞥見しておくのもいいだろう。それは、直接的には、Coleridge が想像力の枯渇を嘆いて書いた、“Dejection: An Ode” を巡っての診断であるが、Eliot の唱える＜感受性の分離＞を回復できない Coleridge 自身の全体像を言い当てている。

And haply by abstruse research to steal

From my own nature all the natural man. (*Dejection: An Ode*)

の2行を引用しながら、Eliot は次のような告白をする。

The lines strike my ear as one of the saddest of confessions that I have ever read. 「これらの詩行は、私がこれまで読んだなかで、最も悲しい告白の一つとして、私の耳を打つ。」

哲学・形而上学 (abstruse research) に傾斜してゆき、＜自然人 (the natural man)＞のすべてを奪われてしまったという、詩人としての死を宣言する、悲痛な詩行である。同じ詩のなかで、Coleridge は、月と星明かりの夜空を見上げて、なるほど「美しい」

質的な意味での〈住む〉とは、そういう事態のことであった。Heidegger 学者 Julian Young の言い方を借りておこう。

Essential dwelling, according to Heidegger, is “nearness to Being”, man’s “ex-sistence”, that is—attending to the Latin derivation of the word—his “standing-out”—standing out of the clearing of the world and into its “other side”, the “Other” of beings. I shall call this “transcendence”.²⁵
 「本質的に住むこととは、ハイデッガーによれば、〈存在への近さ〉であり、人間の〈実存＝外へ－置かれること〉であり、言葉のラテン語語源に従って、彼が〈己れから－出で立つ〉在り方である。世界の空け明けから外に出で立ち、その〈別の側〉つまり、存在者の〈他者〉へと入り込むことである。私はこれを〈超越〉と呼ぼう。」

.....

14歳の Wordsworth は、秋の夕暮れ、Hawkeshead と Ambleside の中間の道路で、後に〈我が詩的的人生における重要な出来ごと〉として回想するに至る、〈多様な姿をとって無限に変化する自然の現れ〉を目撃した瞬間を、次のように描写している。

と感嘆する。しかし—

I see them all, so excellently fair;

I see, not *feel*, how beautiful they are!

理性の目には美しく映る夜空も、心（＝感性）では感じ取ることが出来ない、という嘆き、理性の目が、雰囲氣的空間を締め出し、同時にそれから、詩人が締め出され、世界を喪失したことの、悲痛な認識を示しているだろう。世界がリアルな感じで、詩人に迫ってこないのだ。このような形で、Walter Pater の言葉を借りて言えば、「Coleridge は住むべき故郷を喪失しては、永遠の“Home-sick-ness”に引き裂かれる典型」（Pater, 167）と見なされることになる。言うまでもなく、これが Schiller が〈感傷的（sentimental）文学〉として定義したロマン派文学の内実なのだが、Wordsworth はゲーテと共に、ギリシャ精神に近い、〈素朴（naïve）文学〉に、より接近していたのではなかろうか。

²⁵ Julian Young, *Heidegger's Philosophy of Art*, 125

... while the solemn evening shadows sail,
On slowly-waving pinions, down the vale;
And, fronting the bright west, yon oak entwines
Its darkening boughs and leaves, in stronger lines.

(“An Evening Walk”: 212-15)

・・・厳かなる夕べの影たちが 谷間を下るように
緩やかに波打つ翼に乗って 航海するとき
そして 輝く西空に向かって 向うの檜の木が その
暗がり行く大枝と葉を もっと強い線を描いて より合わせる。

Wordsworth は、この詩行は「弱々しく、不完全な描写」だと断っているが、それでも、この出来ごとについて、これまで如何なる詩人の「誰も描写したことがない光景」であり、＜私＞の仕事は、この＜描写の欠陥を補って行く＞ことだと決意し、詩人の道を突く進んでゆくことになる。恐らく白鳥の群れが空を飛んでおり、それが影となつては、緩やかに谷間を下る。そして、夕陽を浴びた檜の木は、屹然として西空に顔を向けては、生き物のように姿態をくねらせる。これが、空と＜私＞の中間地帯で屹立した輪郭をえがいている・・・このような風景の現れが醸し出す雰囲気は、冒頭の＜厳かなる (solemn)＞という一語に表現されている。そして、この雰囲気は、言うまでもなく、外部の風景が分泌するものである以上に、少年の内部で芽生えた感情であるだろう。このとき、風景は Wordsworth 少年の感情に潤色されては、心の＜内部＞風景として反転しているのだ。そして、Wordsworth 少年にとって、それが＜喜び＞を与えたというのは、単に目の前の風景が美しいということだけではなかつただろう。それは、いつもの見慣れたありふれた風景が、この瞬間に、一種異様なくこの世ならぬ＞風景を突き付けたからである。日常のありふれた世界に、このような形で、いわば＜異界＞というべきものが侵入してくる。このような形で、外部風景が拡大するとともに、少年の心も拡大して行く、少年の＜感情＞を土台として。少年の、世界に対する＜地平＞が拡大したのだ。また、放浪の

詩人 Rilke は、Spain の Toledo 滞在中に、Wordsworth の詩的営みを更に突き進める形（つまり、想像力理論と絡ませて、ということだ）で次のように述べるが、基本的な姿勢は Wordsworth のそれと同じである。

... there the external Thing itself—tower, mountain, bridge—already possessed the extraordinary, unsurpassable intensity of those inner equivalents through which one might have wished to represent it. Everywhere appearance and vision merged, as it were, in the object; in each one of them a whole inner world was revealed— This, a world seen no longer from the human point of view, but inside the angel, is perhaps my real task—²⁶ 「ここでは、外部のものそのもの—塔、山、橋—が、既に＜内部の等価物＞が持つような、異様で超越的な強烈性を所有しているのであり、それを通して人は、—同じ光景を見たら（筆者）—何かを表現したいと願ったことだろう。いたるところ＜現れ＞と＜ヴィジョン＞がいわば、物体の中で合流しているのだ。それらの一つ一つのなかで、内部世界全体が顕現させられていた。・・・これこそ、人間的な視点からはもはや見られず、天使の内側でのみ見られる世界、これが多分私の真実の仕事なのだ。」

ここでもはっきりと、Rilke は詩人としての自覚を披歴している。＜もの＞自体が突き付ける＜異様で超越的な強烈性＞を感受することが詩人の務めであり、また、それが＜内部世界全体＞を顕現させることに繋がるのだという。ここで語られる＜天使＞とは、Wallace Stevens が述べる、＜至高の虚構（supreme fiction）＞を建設すべき＜必要な天使（an necessary angel）＞と等価の、詩人の想像力の謂いであるのだが、今は、一種異様な Rilke の表現を確認しておく。それは、

²⁶ AAP, 230

いたるところ、物体のなかで、現れとヴィジョンが合流していた。

という Rilke の＜視覚＞の在り方のことである。ある＜もの＞の姿の背後から、その姿に密着して、何か別の姿が現れては、謂わば二つの＜姿＞が織れ合っ
て一体となり、＜もの＞がその場で変貌している（これが Rilke の謂う＜ヴィ
ジョン＞）瞬間のことであるだろう。前に挙げた Wordsworth の櫛の木の＜姿＞と
同じような変貌の瞬間である。＜櫛の木＞という一個の＜もの＞が、＜雰
囲気＞に包まれて＜意味＝こと＞として生成している瞬間なのであり、Heidegger
ならば、＜存在者＞と＜存在＞の二重構造と呼ぶであろう事態の顕現の場な
のである。Heidegger の説明に耳を傾けよう。

有（＝存在）そのもの—その意味は：現前しているものの現前（Anwesen
des Anwesenden）ということです。言い換えれば、現前しているものと
現前することとの二者が一体であることに基づく二重構造（die Zwiefalt
beider aus ihrer Einfalt）のことを謂うのです。

この二重構造こそ、人間に要求して本質へと向へ、と求めるものです。

．．．．．

人間たるものがこの二重構造に関わるとき、そこで支配的な力となってい
るものは．．．言葉（die Sprache）となるわけです。²⁷

この文章は、Wordsworth と Rilke の営みを、寸分違えず言い尽くしている。こ
のような二重構造は、従って、＜言葉＞のなかにその＜住む＞場所を見出すの
であり、＜もの＞がそこで＜もの＞の新鮮さと生気を失うことなく、安らぐの
である。＜もの＞は死んではいないのだ。＜ものは、ものしている（A thing
things）＞、＜世界は世界している（The world worlds.）＞という一見奇妙な
Heidegger の表現は、その事実を語る以外の何でもなく、＜生きた世界＞の＜も
の＞を、生きたママに言葉のなかに保護すること、このようなことが、現実の

²⁷ Heidegger, *On the Way to Lay to Language* (以下 WL) 30

地理的な観点から見た住むべき〈故郷〉を見出す（実践的行為）その前に、まずもって、詩人が果たすべき、最初でそして究極の最後の仕事となって来るのである。これを〈存在論的实践〉と呼んでおこう。

Wordsworth はここで、「不完全ながら」も、ひとまずは、それを詩的なイメージで表現することに成功した（〈もの〉を〈言葉〉の中に庇護した）と言えるのだが、この箇所が中心的な磁場（a spot）となつては、渦が拡散してゆくような形で、様々な〈時の時点（the spots of time）〉に焦点を合わせ、それらを心の内部で再回収しながら、自己の魂の拡大の方向に向かって行く。このように〈回想〉の営みのなかで、消え去って痕跡となった神々も、その都度誕生しては、彼を寿ぐ筈である。また、Rilke の方は、上に引用した文章が友人あての手紙のなかの文章ということでもあり、そこではイメージとして定着はされていないけれど、やがて、詩人の想像力は、〈天使〉として、或いは、己れが仮託した Orpheus の姿となつて、二つの雄編『悲歌』と Orpheus のなかで、果たされてゆくことになる。今は、異様な風景が突然、二人の詩人を襲つては、〈救い〉を求めている、或いは〈合図〉として詩人を手招きしている、その事実をしっかりと確認しておこう。

III 大地の宗教

前の章で、「解体されつつある、古き良きゲメインシャフト」という言葉を使ったのであるが、そのなかで解体され、消え去りつつあるもの、或いは消え去ってしまったもの、そしてそれゆえに〈郷愁〉の思いとともに、余計に強く現前してくる〈貴重な〉もの、それらを大まかに纏めれば、

- (1) 土地 = 大地への敬い
- (2) 神々（Wordsworth の言う〈土地霊 = ゲニウス・ロキ〉）への信仰
- (3) 先祖 = 死者への畏敬と崇拜²⁸

²⁸ 死者たちは、地下の世界で成長を続けている、そしていつも地上にいる人間にいつも〈委託〉をし続けている。これは、『悲歌』のなかの一貫した主張である。死んで天国

となるであろうが、Wordsworth は言うに及ばず、Rilke にも Heidegger にも、その趣旨を述べる言葉には事欠かない。この三つの要素は、上から順番に価値的な序列を示しているわけではなくて、それぞれが並列的な重さをもちつつ、融合し合う三位一体を形成していて、これを＜宗教 (religion)＞と呼んでも、恐らく正酷を射ている。どこか、我らアニミズム的日本人の宗教によく似ているのであるが、このような意味で、正当的キリスト教とは異なった意味で、彼らもまた純粹なく宗教的人間＞であるに違いない。そうして、この＜宗教＞が寄って立つ地盤とでも言うべきものが、(1) の＜土地=大地＞への敬いという一点あるだろう。我々の魂は、Plato やキリスト教の教え²⁹とは違って、そもそも、大地を離れることを良しとはしていないし、天空への飛翔を求めるのではない。「魂は、ひたすらにただ、大地を求めている・・・」と、Heidegger は、Trakl の詩を解説する際に、力説する。

The earth is that very place which the soul's wandering could not

へと帰った Lucy にしても、死んで教会墓地に＜眠っている＞あの＜鼻を真似る少年＞にも、恐らく同じことが言える。Wordsworth が *The Prelude* を通して Coleridge に語る理想的共同体とは、次のようなものだ。

There is

One great society alone on earth:

The noble living and the noble dead.

Thy consolation shall be there (Prel. 1805, X: 967-70)

²⁹ Heidegger にとって、そもそも、前ソクラテス期において physis = nature と名付けられていた＜自ずから生成する、存在者の全体＞＝＜大地＞を忘却せしめたのは、Plato であり、キリスト教であり、近代形而上学 (= 近代技術) であった。一か所のみ引用しておこう。「この故郷の＜大地＞というのは、・・・近代的な意味における「自然」とは違うのである。・・・ギリシア人によって解明され言葉とされたこの根源的自然 (natura-ピシス) は、後の異質な二つの力によって脱自然化された。ひとつはキリスト教であった。すなわちキリスト教によって自然はまず「創られたもの」におとしめられ、そして同時に超-自然 (恩寵の国) との関係にもたらされたのであった。次には近代自然科学によってであった。それは、自然を、世界交通や産業化、あるいは特別な意味における機械技術という数学的秩序の威力圏に解消してしまった。」(『ヘルダーリンの讃歌』219) ここで言及されるキリスト教のその前に、勿論プラトニズムが、天と地を分け隔てた (形而上学の誕生) もう一つの原因であった。

reach so far. The soul only *seeks* the earth; it does not flee from it. This fulfills the soul's being: in her wandering to seek the earth so that she may poetically build and dwell upon it, and thus may be able to save the earth *as* earth.³⁰ (強調は原文のまま)「大地は魂のさすらいがこれまで到達できなかった、まさにその場所である。魂はただひとえに大地を求めているのだ。大地から逃げ去るのではない。ここが魂の存在を満たすのだ。魂はそのさすらいのなかで大地を求めが、それは、魂が大地の上に詩的に建てて住むことが出来るようになる。そうすることで、大地を大地として救うことが出来るのだ。」

Wordsworthの人口に膾炙する詩行はそのことを凝縮した形で提示している。近代の数学的・計量的な科学思考 (intellect) が、自然を解体してゆくことを嘆きながら、<もの>の生命の尊さを裏側から主張している詩である。

Sweet is the lore which nature brings;
Our meddling intellect
Mis-shapes the beauteous forms of things;
--We murder to dissect. (“The Tables Turned”)

自然が齎す知識は、心地よい。
我らのお節介な知性が
美しき<もの>の姿を歪めてしまう。
我らは、それを解剖しては殺してしまう。

<自然><大地>は、<事物の力強い一群をなして><永遠に人間に語りかけながら (for ever speaking)>³¹、詩人に救いを求めている。ここで、上に引用

³⁰ Heidegger, “Language in the Poem”, *WL*, 163

³¹ “all this mighty sum / Of things for ever speaking” (“Expostulation and Reply”)

した Heidegger の文章のなかには、恐らく彼の後期の思索のエッセンスが披歴されているだろうと考え、まとめてみる。

- (1) 魂はまだ、大地に達してはず、必死に大地を求めている。³²
- (2) 魂が大地を求めるのは、そこに＜詩的に＞＜建て＞て、＜住む＞ためである。
- (3) それが、大地を＜大地として＞救うことに繋がる。

＜詩的に＞＜建て＞る＜住む＞＜大地を救済する＞—いずれも、別の箇所、特に“Building Dwelling Thinking”と“The Thing”という論考で詳述される根本的テーマのことである。が、今は述べておくべきことは、上で述べた三位一体のうちの(2)と(3)：

- (2) 神々 (Wordsworth の言う＜土地霊＝ゲニウス・ロキ＞) への信仰
- (3) 先祖＝死者への畏敬と崇拝³³

が、密接に絡み合っていることである。大地は、立ち去りし神々の帰還を待ち望んでいるのであり、大地に抱かれて、大地としっかり結び付いた死者たちからは、その目配せ・合図が送られてくる。

メキシコの詩人 Octavia Paz はその名著『弓と豎琴』のなかで、近代詩の営みを次のように明言している。

神性の世界が相変わらずわれわれを魅了し続けているのは、知的好奇心を超えたところに近代人のノスタルジーがあるからである・・・近代詩の

³² John Keats がこの世を＜靈魂創造の谷間 (the vale of Soul-making)＞と呼び、それが「キリスト教よりも壮大な救済の体系だ」と名指す時、同じことを語っている。*The Letters of John Keats*, II, 102

³³ ベルクはこの＜土地霊＞の喪失を、近代化の本質と見る。「それから宗教的な意味を抜き取り、＜土地の霊＞という表現を単なる世俗のメタファーのレヴェルに引き戻してしまったのが、本来の意味での近代である。』『地球と存在の哲学』218

ロメテウスの企ては、宗教に対する好戦性にあり、それは今日の教会によって与えられている〈聖域〉に対抗する、新たな〈聖域〉を創造しようとする意図の源泉である。³⁴

Kate Rigby がロマン派の仕事が Abrams の名著が力説した〈世俗化 (secularization)〉という概念ではなく、新たに提案する〈再聖化 (re-sacralization)〉なる一語で言い当てようとする³⁵ ときも、Paz と同じことを言っている。天国でもない、死後に救いを求めるでもない、まさに、〈死を能くする (sterblich) 人間 (Heidegger)〉が、この〈現世〉に、そしてこの〈大地〉のなかにうつしみの〈肉体〉をもったままで、〈聖域〉を創造すること、それである。〈大地〉を寿ぐ宗教・・・

Rigby は、この〈再聖化〉が、いかにロマン派詩人^{なつかし}にあつて、それまで西洋形而上学の視角偏重主義が蔑ろにしてきたところの、〈肉=身体=感情〉なるものを基盤にして立ち上がるか、そのことを説得力を持って、語りかける。

風景という意味での場所の再評価は、人間以上の自然の世界のなかで現れる〈聖なるもの (the sacred)〉の感覚を、ロマン派詩人が再発見したことと繋がりがあがる。というのも、その聖なる空間というものは、もはや、人間が作り出し、教会によって神の栄光を寿いで祀られる場所にはもはや限定されないということの意味するからだ。聖なる空間は、むしろ、常に既にそこにあつて、空と大地に向かって開かれた場所に、所与のものとして再発見されるのを待っているのだ。自然と想

³⁴ Paz 『弓と豎琴』 1945

³⁵ M. H. Abrams (in his *Natural Supernaturalism*) shows how the romantics “set out in various yet recognizably parallel ways, reconstitute the grounds of hope and to announce the certainty, or at least the possibility, of a rebirth in which a renewed mankind will inhabit a renovated earth where he will find himself thoroughly at home.” But Abrams’s “secularization” is misleading. “Resacralization” is the very term of the romantics’ task. (Kate Rigby, *Topographies of the Sacred: The Poetics of Place in European Romanticism*, 45)

像力を歌うロマン派の詩人は、従って、聖なるものの地誌学者 (topographer of the sacred) になって、風景のなかに聖なるものの痕跡を訪ねるのである。それは、恐らく、心と、そしてもっと重要なことは、＜肉＞で感じられることによって、共同作業として生成させられる。³⁶

Rigby は、ここでは＜心 (mind)＞と＜肉 (flesh)＞と言う言葉でもって、それらを再聖化へのバネと言っているが、これは上で言及した Wordsworth と Rilke の一節における、身体全体が抱えている様々な＜雰囲気＞を分泌する、五官を統合した意味での、＜感情＞の謂いに他ならない。それは、Bachelard が＜形式的想像力＞に対して、＜物質的想像力＞と名付けた、その想像力の根拠となる場所のことである。このような＜心情＞の空間として、「聖なる空間は、・・・常に既にそこにあって、空と大地に向かって開かれた場所に、所与のものとして再発見されるのを待っているのだ。」詩人たちは、＜もの＞たちと出会っては、その「なかに聖なるものの痕跡を訪ねるのである」。これが、大地を寿ぐ宗教の内実なのである。

.....

Wordsworth は、放浪の旅から湖水地方の Grasmere に戻り、妹 Dorothy と共に＜住処＞を見つけた時の喜びを、有頂天ラブソディックなまでの喜びで寿いでいる。³⁷

-'Tis, but I cannot name it, 'tis the sense
Of majesty, and beauty, and repose,
A blended holiness of earth and sky,
Something that makes this individual spot,

³⁶ Kate Rigby, 53 拙訳。

³⁷ この一節は、1888年に『Wordsworth 詩集』が刊行されたときに、Walter Pater が真っ先に＜自然詩人＞としての Wordsworth の精髓として称えた一節である。Selected Writings of Walter Pater, 130-31

This abiding-place of many men,
A termination, and a last retreat,
A centre, come from wheresoe'er you will,
A whole without dependence or defect,
Made for itself, and happy in itself,
Perfect contentment, Unityentire.

(“Home at Grasmere”, MS. D: 142-51)

まさにそれなのだ。しかし、名づけることは出来ない。それは
荘厳さと 美と 休息の 感覚だ。
大地と空との融合した 神聖さだ
この孤立した場所を作り上げる 何か
多くの人間の 住むべき この場所
終着点であり 最後の安息所
きみがどこから来ようとも 一つの中心
依存も 欠陥もない ひとつの全体
自らのために作られ 自ら幸福で
完全なる満足と 完全なる統一

偉大なる10年（The Great Decade）のWordsworthは、この一節の、この大地に有ることの<幸福>を歌うために、そして、この<幸>の生成を<ありふれた一日の素朴な生産物（the simple produce of a common day）>として寿ぐために、夥しい詩と散文を書いたと極言できるであろう。一方、Rilkeは、『悲歌』の第7歌のなかで、端的に次のように語る。

Hiersein ist herrlich.

ここにあること、それは栄光あることだ。

この「ここにあること、それは栄光あることだ」を宣言するために、全詩業が有ったと言える。Wordsworthにしても、Rilkeにしても、大地にあることのこの＜幸せ＞、この＜栄光＞の一瞬を謳歌するために、その詩的営みの全てがあったと言えるのだ³⁸。いずれも＜死＞という暗い世界に直面し、世界と対面する際の生彩ある輝きの喪失と引き換えに、そして暗い死を背後にして際立つ生きることの喜びを一＜神々の閃光＞に射抜かれてきらきらと煌めく存在の明るみを一彼らは読者に伝えてくるのだ。そして、例えば Wordsworth の場合を例に挙げれば、*The Prelude* という＜詩人の精神の発展＞を確認し、見届けた上で、＜共同体＞全体が共に＜住む＞べき枠組みを設定して行くこと、それが“Home at Grasmere”での（更には、執念の、結局は見果てぬ夢に終わった、ライフ・ワーク *The Recluse* 『隠遁者』3部作での）試みに繋がってゆくだろう。そして、そのことを哲学的に、そして詩的に明確に解き明かす Heidegger も、近代に巣くうニヒリズムを克服しながら、「天と地と、死すべき人間とそして神々」の四者が相集い（四方域 = das Geviert）、酒神ディオニソスを召喚しながら、＜世界遊戯（Welt-Spiel）＞というニーチェ的な、輪舞の祝祭へと我らを誘ってゆく。そして、詩人たちが、己れの地平を拡大してゆくのと同じように、Heidegger も、初期の『存在と時間』で規定した幾分陰鬱な＜世界＞概念をおおきく広げて、上述の「世界」（＝四方域）を構築して行くのだが、その営みの中枢には、やはり詩人たちと同じように＜もの＞が中心的な位置をしめているのであり、Heidegger は、真に＜住まう＞ためには、＜もの（Ding = thing）＞のもとに留まり、＜もの＞を本来の有り方で＜露わにさせ＞＜庇護する＞ことが必要である、と力説していることを忘れてはなるまい。³⁹

³⁸ 浅井真男氏は、この一行を次のように註解される。「これが『悲歌』全体の核心をなす。いな、むしろこの一句を正当の権利を持って言いうるがためにこそ、リルケの永い厳しい詩作の道が歩まれたとさえ言える」。（『ドゥイーン悲歌』、164）

³⁹ Heidegger は、前期の『存在と時間』から、実存的な転向（Kehre）を果たしたと言われる。その大作『存在と時間』は未完結に終わった。結局、彼自身が批判の矢を向ける＜形而上学＞の、その枠内に留まってしまったことに対する危惧の念があり、そこからの脱出口を見つけるために、詩 = 芸術の手がかりを求めたと言われる。そこでは、＜存在忘却（Seinsvergessenheit）＞はひたすら＜現存在＞の過失として把握されてい

.....

今ここで、Heidegger → Rilke の〈大地 (die Erde)〉について、一言述べておく。この〈大地〉とは、もとより、物質的な「土地」「地球」を第一義としながらも、前述の〈住む場所〉と似たように、どこか可視的なもののやや後方にある、或いは、ごく真近にある、その土地とそこに住む人間をしっかりと土台から支えるような、そのような、今述べたような意味での、一種の〈根源的な雰囲気 = “Grundstimmung” (Heidegger)〉をも包みこんだ、或いは、そのような雰囲気を分泌してくるような、日本語で〈風土〉と呼べばしっかりと行くような、そのような実と虚で織りなされた場所・空間みたいなものであろう。⁴⁰ 〈虚〉が〈実〉を背後から支え、そこに分厚い意味空間を形成し、同時に〈実〉が〈虚〉の在り処を明るみに齎す〈場所〉。Heidegger の言う〈存在 (Being)〉と〈存在者 (beings)〉が二重折れに重なり合う場所、また日本的な〈こと〉と〈もの〉が同居しあう時空、我が俳句の世界で生成してくるような世界。そのようなものとして、〈大地〉はある。それが、人間の魂の〈故郷 (Heimat)〉⁴¹

たのであるが、後期 Heidegger にあっては、〈存在〉自身が自ら身を隠すという、方向転換がなされ、同時に〈世界〉の概念が大きく変わった。前期の Heidegger にあっては、〈世界 (Welt)〉とは、極論すれば、生を受けると同時に人間が否応なく無力のまま投げ込まれる、この人間社会という、狭い領域をさしていたのであるけれど、後期には、この世界は、先ほど言及したように、極めてロマンティックな〈四方域 (das Geviert)〉として、「天と地と神々とそして死すべき人間」との四者で構成される〈世界〉として把握される。言うなれば、前期の暗い人間把握から、輝く生を生きる幾分楽観的な把握への変化かもしれないけれど、しかし、そこには〈死をよくしうる (sterblich)〉者〉という条件が、厳として厳めしく突き付けられている。

⁴⁰ ドイツ語では“die Erde”, 英語では“the earth”で、いずれも日本語でははっきりと分節されている二つの意味: (1) 〈地球〉 (2) 〈大地〉を覆い包む言葉であるゆえに、厄介であるが、科学者と違い詩人に於いては、後者の意味が大きく前景化するだろう。同じく厄介なく自然 (= Nature) に関しても、同じことが言える。なお、Heidegger, Rilke の〈大地〉と〈地球〉概念の微妙な揺らぎについては、下記が詳述している。小林康夫『表象の光学』(特にその第4章)。なお、佐賀啓男 / 長谷敏夫 (訳) 『ハイデガーと地球』(東信堂, 2010) の原題は、McWhorter (ed.), *Heidegger and the Earth* であるが、この“the Earth”は〈地球〉ではなくて、〈大地〉と訳すべきである。〈地球〉と訳せば、Heidegger の存在論的〈大地〉感が払拭されるのではない。

⁴¹ ドイツ語の“Heimat”という概念は、多国語への翻訳は不可能だという。(この概念の詳細は、Peter Blickle, *Heimat: A Critical Theory of the German Idea of Homeland*.)

なのだ。Rilke は、その故郷が、太古の世界へと連綿と繋がっており、我らの魂が完成された暁には、その太古へと帰還して行くことを、次のように歌う。

Wandelt sich rasch auch die Welt
wie Wolkengestalten,
alles Vollendete fällt
heim zum Uralten. (*Orpheus*, I. XIX)

世界はその形態を 雲のそのように
素早く変化させ続けるが、それでも
完成されたものは、太古の世界へと
帰還する。

Wordsworth の＜大地 (the earth)＞についても、＜自然 (Nature)＞に關しても、似たようなことが言える。可視的な自然の＜もの (natura naturata)＞であるかと思えば不可視の存在（例えば“spirits”とか神、及び神々）が内在する生命体⁴²でもあったり、詩人を抱いて安らわせる女神であったり・・・悠久の

英語では“homeland”, 日本語では＜故郷、古里＞、それぞれに、民族の太古からの雰圍気を重々しく宿した言葉ゆえに、翻訳すれば、その内実が消えうせてしまう。なお、Jonathan Bate は、“Heimat”の英語への翻訳事情について説明するが、18世紀には、それは＜郷愁 (nostalgia)＞の意味であった。The word “nostalgia”, with all its Reussese associations, entered the English language in the late eighteenth century as a translation of German *Heimat*, the technical term for Swiss homesickness. (J. Bate, 51)

⁴² Coleridge が若き日の Wordsworth を＜半-無神論者 (semi-atheist)＞と呼んだことはよく知られているが、その若き日の Wordsworth の神・観については、アニミズム、汎神論、多神論 (polytheism) など、幾つかの呼称がつけられるけれど、Hirsh Jr. (*Wordsworth and Schelling*) に倣って、＜万有在神論 (pan-en-theism)＞が最も相応しいと思われる。「Wordsworth の宗教は、pantheism というよりは、panentheism に近い。」(29ff.)。以下、『ブリタニカ国際大百科事典』をひも解いてみる：「世界内在神論」＝「万有在神論ともいう。ドイツの哲学者 F. クラウゼが自説に与えた名称。神は世界に内在するが、世界よりも大きく、優れている。すなわち万有は神の内にある。有

太古から人間を優しく庇護し、己れ自身生成変化を繰り返し「雲のように形態を変化させ続け」(natura naturans) ながら、現在の生の礎^{いしづえ}になっては、未来への希望を抱かせる、それらの要素が一挙に多義的なまま内在するのが、彼の〈自然〉⁴³という言葉なのだ。そして真に〈住む〉ことは、このような形で実現するだろう。

私は〈虚〉へと出で立つ在り方(それが Dasein)をしており、〈虚〉へと出で立ち〈他者〉の中へと入り込みながら、同時に〈実〉にもいる。これが〈存在への近さ〉であり、〈住む〉ことであり、この〈実〉と〈虚〉の二重構造のなかに帰郷すべき Heimat はある。

IV 自然の合図

Es winkt zu Fühlung fast aus allen Dingen,
aus jeder Wendung weht es her: Gedenk!
Ein Tag, an dem wir fremd vorübergingen,
entschließt im künftigen sich zum Geschenk.⁴⁴

殆どすべての〈もの〉たちから 我らの感情に向かって合図を送られる
あらゆる変化から そっと風が吹いてくる—「思い出せ」と。
我らが よそよそしく 過ぎ越した一日が
いつか 我らへの贈り物となって 立ち返ってくるのだ。

神論と汎神論との総合を、カントとヘーゲルおよびシェリングの哲学の結合によって行っている。」周知のように、Wordsworth は、偉大な 10 年の後、1805 年あたりを境に、キリスト教一神論への傾斜とともに、〈住む〉ことの考えが、〈墓〉→〈来世〉への信仰へと大きく変化する。同時に、詩人としての彼は〈死んだ〉と称される所以となる。

⁴³ 言うまでもなく、Wordsworth の〈自然〉は根底のところ、Heidegger が規定する古代ギリシャの Physis 概念に通じている。(前の注 29 参照)

⁴⁴ Rilke のこの詩のみは、次の書物からの引用である。和訳は私のものである。生野幸吉 / 檜山哲彦 (編) 『ドイツ名詩選』 211

これは Rilke の詩である。自然の＜委託＞は、Rilke がここで語っているように、＜すべてのもの (allen Dingen)＞から送られてくる。＜合図 (Wink)＞として。それは、風に乗って我らの感情 (Fühlung) へと向かってやってくるのだ。恐らく、“Immortality Ode” のなかで、＜眠りの平原 (the field of sleep)＞から吹いてきた風と等価であるだろう、靈感を焚きつける風なのだ。ひょっとしたら、それは＜過去＞から吹いて来るのであろう、そして＜思い出せ＞という＜委託＞を突き付けて来る。＜回想＞のなかで、見落としていた＜もの＞たちが、本来の姿を取り戻すべく、委ねてくるその要請なのである。同時に、それが＜贈り物 (Geschenk)＞となって送られては、詩人の内部で、大きな財宝となる。＜もの＞は、今度は、詩人の心の内部で＜もの＞として本来の姿を顕すことになるだろう。それが、Heidegger の命名するところの、＜静寂の響き (das Geläut der Stille)＞なのである。⁴⁵ 言葉を変えれば、ここで＜風＞は、自然からの＜合図＞を感受して、幼年時代を取り戻せ、と詩人に呼びかけているのである。ここで、冒頭の一行に目を留めてみる。この＜合図＞を送って来るのは、非人称の主語“es“ (=it) である。名前もない、名づけようもない、そのような得体の知れぬものが、＜合図＞を送る。未-分節の、未-概念的な何か、詩人は、それに名付けをしなければならない。それが＜もの＞を救うもう一つの方法である。というか、詩人にとって＜もの＞の救済は、すべてここに懸っていると置いてよい⁴⁶。

⁴⁵ 思えば、“Burnt Norton” で T. S. Eliot が耳にした＜子供の笑い声＞も、それと等価だ。この＜静寂の声＞は、強く＜無垢性＞を暗示する＜光を浴びた＞＜子供の笑い声＞として届いて来る。

Suden in a shaft of sunlight
Even while the dust moves
There rises the hidden laughter
Of children in the foliage. (“Burnt Norton”: 169-72)

ちなみに、ここで描かれる＜埃 (dust)＞とは、過去と現在の間に介在して、両者を遮断する埃である。要するに＜子供の笑い声＞は、この＜埃＞の向う側に位置する＜過去＞の方から詩人に届いて来るのである。

⁴⁶ Heidegger は、別のコンテクストに於いてであるが、ドイツ語の“es gibt”, フランス語の“il y a”を取り上げて、この非-人称主語を＜言葉＞であると説明しているが、それは、Rilke のこの詩にも該当する筈だ。“The Nature of Language”, WL. 88

前章で、〈櫛の木〉の異様な姿に我を忘れた 14 歳の少年について、風景の拡張は同時に少年のこころの地平の拡大ということを語った。かような風景が現前したのは、少年の感受性が、外部の〈合図〉を受け止めて、それに感受したからに他ならない。そして西空の彼方から、少年が位置する場所にいたるまでの全風景が、名指された言葉のなかに安らうことによって、つまり、詩人の心が〈住む〉場所となって、新たに生命を得たに相違ない。

Heidegger は人間のあり方を周知のように、〈現存在 (Da-sein)〉と規定するが、人間的な〈自己〉は、ここ (“da”) に於いてあると同時に、あそこ (やはり “da”) へと出で立つ〈実存 (exi-stenz) (ec-stacy)〉態として生きている。見えてくるのは、水平的であると同時に垂直的な人間地平のあり方であり、Wordsworth にも (Rilke にも) ダイレクトに係わり合う、のびきならぬ局面である。〈私〉は、〈ここ〉に居るのと時を同じくして、常に〈あそこ〉へと出で立っている。・・・〈あそこ〉とは、西空の果てかもしれず、同時に、それは暗黒の〈死〉の世界かもしれない・・・〈ここ〉と〈あそこ〉とは、水平的に連続して存在しているものではなしに、非・連続の連続、間に深く深淵〉を宿した連続体であるに違いない。私は、この〈深淵〉という敷居の上に、不安定な形で宙づりさせられている。抽象的な言い方になったけれど、水平的なアスペクトで見れば、〈ここ〉という此岸から、〈あそこ〉という彼岸への運動、垂直的なアスペクトでは、表層的自我 (ego) から深層 = 真相の自己 (the Self) への動きであり、そのようにして、水平的にも垂直的にも、詩人 (と限らず、私たちすべて) のこころは広さと深さを増して行くのだ。そして、言葉が、それに介在するのであろう。いずれにしても詩人は、何やら得体の知れない〈あそこ〉をしっかりと見据えて、その〈あそこ〉を言葉で名指ししなければならないのだ。名指さなければ、その〈あそこ〉は亡霊然として消え去るかもしれない。〈ここ〉と〈あそこ〉を名指すことによって、言うまでもなく、詩人のいる〈ここ〉が意味を持つてくるのである。その為には、幼年時代のような全感受性をもって、自然と対峙する必要があるだろう。感覚が枯渇すれば、自然は 18 世紀のそのように死んでしまい、大地は消えうせるだろう。

Wordsworth のそのようなく名指す〉行為について、〈時の諸点〉から一つ

のエピソードだけを今取り上げてみよう。詩人が＜深淵＞へと突き落とされて、そこで宙づりになった、まさに Hölderlin の謂う＜危険＞の現場である。それは、＜ボート漕ぎの少年＞に訪れる悪夢の描写である。

...after I had seen

That spectacle, for many days my brain
Worked with a dim and undetermined sense
Of unknown modes of being. In my thoughts
There was a darkness -- call it solitude
Or blank desertion; no familiar shapes
Of hourly objects, images of trees,
Of sea or sky, no colours of green fields,
But huge and mighty forms that do not live
Like living men moved slowly through my mind
By day, and were the trouble of my dreams. (*Prel.* 1805, I: 417-26)

・・・その光景（＝山の亡霊）を
見た後 幾多の日々 私の頭は
未知の存在の様式に対する 臃な未決定の感覚に
悩まされた。 私の考えのなかには
暗闇があった—それを孤独とも
虚ろな遺棄とも呼ぼうか—ありふれた日常の
慣れ親しんだものの姿形も 木々のイメージもなく
あるのは 巨大な力強い形態であり 現実の生きた人間
のように生きてはいず 昼間は 私のころのなかを
ゆっくりと動き 夜は夢を邪魔する厄介物となっていた。

＜暗闇＞＜孤独＞＜虚ろな遺棄＞—それは、無力なまま支える物さえない、まさに＜宙づり (hanging)＞の少年を言い当てている。言い知れぬ＜悪夢＞の瞬

間であって、少年は<ヌミノゼ (das Numinöse)>感覚に支配されており、それゆえに無力感そのものであるだろう。しかし成人した Wordsworth がその現場を振り返る時、嬉々として描写していることに気付くではないか。

消え去りゆく現実の山が、消え去りながら何かを現わして来るような、<存在の未知の様式>に出くわした少年にとって、それは、自己の地平の拡大へと連携している筈だ。少年は、一瞬だけ、日常世界の自然から抜け出て、恐らく、その向う側から自然を眺めている。そして、ここで描写されているのは、概念的、論理的言語では名指しがたいそれらの存在が、生命をもってこれらの言葉のなかに住まいついたということである。<暗闇><孤独><虚ろな遺棄>と、あと上の一節のどの言葉を取って見てもいい、それぞれの語が、少年の<感情>に潤色を施されて、何か背後にある<不可視>の世界を大きく孕んでは、その<不可視>の者たちが、これらの言葉のなかで蠢いているのだ。詩人 Wordsworth にとって、目に見えない<あそこ>からの<合図>は、このような形で<あそこ>に意味が賦与された上で、<ここ>を生彩あるものへと変貌させているのであって、自然からの<委託>は、ここではそのような形で果たされる。名指しがたき<あそこ>を<ここ>で名指すこと、これを Metaphor (それも、P. Ricoeur の言う<生きた隠喩>)の発生の現場と呼ぶことができるだろう。Heidegger は言う。

<もの>たちが私たちを必要としているのは、名前をつけて欲しいからだ。⁴⁷

そして、この Metaphor 発生の現場で出現しているのは、Kristeva の語る、<概念言語 (le symbolique)>では把握できない<セミオティック (le sémiotique)>な、エネルギーをたっぷり抱えて、色と香をも分泌するような、そのような言葉の現出なのである。いや、<概念言語>へと転換する方向にありながら、始原のエネルギーに引き戻されて、その意味発生の現場へと誘導するようなダイナミックな動きがそこにある。この現場を西川直子氏から借りておく。「この

⁴⁷ "Things need us so that they can be named." (Rigby, 122)

実践の場を、text と呼ぶ。テキストはラングを用い、ラングの場に位置しながら、ラングの秩序を再配分し、新たな意味を産出する。』⁴⁸ —＜表層のテキスト (pheno-text)＞のその下から湧出するようなく生成テキスト (geno-text)』⁴⁹ —こうして、＜あそこ＞は＜あそこ＞のまま、＜ここ＞で＜名前がつけられ＞て、＜あそこ＞と＜ここ＞の中間地帯に於ける生きた意味分節の場となっている。Hartman が、

Heidegger removes the film of familiarity from a basic term and restores the rule of metaphor.⁵⁰ 「ハイデガーは、基本語から慣れ親しみというフィルムを剥いで、メタファーのルールを回復している。」

と言う時、まさしく、Wordsworth のこの現場をも言い当てている。そういう形で、ここでは＜もの＞と＜言葉＞はしっかりと癒着している筈だ。Post-Heideggerian の哲学・美学者 Gadamer の説明を古東氏の著作⁵¹ から孫引きさせて頂いて、この現場を取り押さえておこう。

「言語現象に先だって事物事象が先行しているといった仮象の、更に背後に働く世界経験の言語性」

その原初の言語（性）が、概念言語現象となるプロセスに逆らってまでも、もとの＜もの＞へと回帰するような、そのような動きが見てとれる現場なのである。そういう形での＜もの＞の救済・・・

Rilke が＜危険＞の淵に降りて行った例もあげておこう。そこでは、＜名付け

⁴⁸ 西川直子『クリステヴァーポリロゴス』39

⁴⁹ See, Noëlle McAfee, *Julia Kristeva* (passim)。Kristeva 理論から Wordsworth の＜スケートを滑る少年＞の一節に関して、卓抜な見解を示されているのは、横川雄二氏（「視覚と風景の変容」75-117）である。

⁵⁰ Geoffrey H. Hartman, *The Unremarkable Wordsworth*, 198

⁵¹ 古東哲明『＜在る＞ことの不思議』74

がたい経験 (indefinable experience) > と断りながら、<自然に吸収された (absorbed into Nature)> と明確に断言している一節⁵²である。1913年2月1日に、Rilke が書物を抱えて、ある<櫛の木>にもたれていたある時に、その木から<合図>がなされるという形で生じてくる。その一節が語るのは、その木から突然不意打ちを食らうように、それまで感じられなかった<木の内側からの生命>が彼の脈拍に伝わっては、彼には、外界のすべてのものが、彼の生命の中で脈打っていた、という生々しい報告の文章である。<外>と<内>の霊の交わり、まさしく Wordsworth と同じ経験であるが、Rilke が言葉を探しあぐねた挙句に遂に到達した言葉が、

<自然の向う側へと通り抜けた。(I had passed over to the other side of Nature)>

であった。ここでも Wordsworth 少年と同じように、自然を見ながら、Rilke 自身の自己の拡大が暗示されている(私は、<ここ>に居ながら、同時に<あそこ>にもいるという)訳であり、底知れない<深淵>に宙づりになりながら、<自然の向う側>に己れを置いて、<ここ>を見返しているのだと言ってよい。この章では論じることが出来ないが、Rilke のこの経験、この自然からの<委託>は、『悲歌』と *Orpheus* という、突然襲われた靈感のなかで生成した見事な詩的結晶として、果たされる。

この<自然の向う側>からの視線—それが、Wordsworth と Rilke に共通している<目>なのである。ひょっとしたら、それは、後の章で論じることになるだろう、<死者>の<目>であるかもしれないのだ。

V 自然を<見る>こと

では、Wordsworth と Rilke の<目>に何が生じたのだろうか。以下、三つほどの視点から、彼らの<目>の有りようを考えてみる。いずれも自然の<委託>

⁵² AAP, 290

という意味を持っているのは間違いがない。

(1) 自然は、＜ボート漕ぎ＞の少年の例でみたように、子供の感受性に不意打ちを食らわせては、その＜深淵＞から、＜存在の未知の様式＞を突き付けてくる。ここでよりリアリティーのある＜現実＞が誕生する。詩人たちの＜幼年時＞への郷愁がここにあることは二人の詩人に限っても、共通している。

(2) 自然は天候の変化や、見る主体の感情次第で様相を変える。芸術家の場合、それがあつた一瞬靈感の如き装いを取って、秘匿されたものを示して来る。彼らは、日常人が見ることのできない＜現れ＞をそこに見る。そこには、詩人の深い＜感情＞に浸された＜雰囲気＞的時空が生成する。

(3) 自然の姿は、＜消え行く＞というアスペクトで、委託を委ねてくる。幼年時の感受性の喪失と共に、生きたくもの＞が枯渇し、或いは、＜視覚偏重主義＞という＜時代の病＞によって＜押し付けられ＞＜見せられていた＞イメージが、消去するという形で。そのプロセスのなかで、＜見えない＞形で、自然は詩人の＜記憶＞の中に新たに蘇る。

(4) 二人の詩人に特筆的なことであるが、自然が＜消えゆく＞というアスペクトのなかで、消え行く眼前の自然のイメージの間から、或いは、別の場所から突然＜声＞が届いてきては、眼前の風景が変貌する。この＜声＞は聞きなれない異様な＜音＞であったり、美しい＜音楽＞であったりと、様々な多様性を持っている。

以下、(1) と (2) は説明を要さないと思うので、(3) と (4) の事情を考察してみよう。Rilke は我らの生きている日常 (Heidegger の『存在と時間』における＜世界＞) を＜解釈された世界 (der gedeuteten Welt = the interpreted world)＞⁵³ と呼ぶ。既定の、表層の言語が幅を利かしながら、深層の意味の重さを孕まない情報言語が行き交い、世界の見方も＜理念＞で覆われてしまつて、ものの見方も＜規制＞されているような世界— Wordsworth の時代と同じではないか。ルネサンス遠近法と Picturesque 的なものの規則で制約されて、＜雰

⁵³ “The first Elegy,” 13

囲氣的な>空間⁵⁴が締め出され、ものは<対象>となつては、その<光>を受ける箇所しか存在を許されない。<見える>ものは、<見えない><影>との交差配列という形で構成されているという Merleau-Ponty 的な見方を許さない世界。言うまでもない、Wordsworth と Rilke にとっては、そのような意味での<教育>を受けた<もの>の姿と、現実の裸形の<目>で見る世界が一致せず、大きなギャップをそこに発見したということである。<見えない>ものが、その存在感を詩人に押しつけて、彼らを圧倒してしまうのだ。Heidegger が西洋近世の<咎>として告発するのも、同じであって、人間が Descartes 的に<理性の光>でもって<光>の部分しか見ずに、それを背後で支える<影>⁵⁵を見失った点を次のように語っている。

Everyday opinion sees in the shadow only the lack of light, if not light's complete denial. In truth, however, the shadow is a manifest, though impenetrable, testimony to the concealed emitting of light. In keeping with this concept of shadow, we experience the incalculable as that which, withdrawn from representation, is nevertheless manifest in whatever is, pointing to Being, which remains concealed.⁵⁶

「日常の意見は、<影>の中に<光>の完全な否定ではないにしても、ただ<光>の欠如を見るのみ。真実は、<影>とは、秘められた<光>の放出を、計り知れないけれど明白に証言する当のものなのだ。このような<影>の考えに共鳴しておく、我々は<計量しがたきもの>を、表象からは引き下がつて姿を消しているが、にもかかわらず存在するもの全体のなかに明白に現れているもの、そして秘匿されたままである<存在>を指し示し

⁵⁴ 斧谷彌守一『言葉の20世紀—ハイデガー言語論の視角から—』。この書物のなかで、氏は<雰圍氣的>空間とか<雰圍氣的>同一性という主題で、当書を貫かれているが、これが Heidegger の<心情 (Stimmung)>に該当すると言われている。私も、氏の導きに従ってゆきたい。

⁵⁵ かの<影>—その存在感を示すのが、Cézanne の絵画である。Rilke も Heidegger も、そのような意見を吐露している。

⁵⁶ QCT., 154

ているものとして、経験するのだ。」

彼の言う＜存在＞は＜影＞の部分にあって、「秘められた＜光＞」を「放出」しているのだ。それを＜解釈された世界＞の「表象」行為が締め出してしまうていた、そのような指摘である。

＜表象＞の背後に隠された＜もの＞の実態は、その＜影＞のほうから己れの存在を主張してくる。セザンヌの絵画にこの＜影＞の存在が＜光＞にとっての必須の生存要件として見てとったのが、そもそも Rilke → Heidegger の＜目＞であったが、この＜光＞と＜影＞の交差配列を、この自然の＜明暗法 (chiaroscuro)＞を見届けて、歌うこと、それが、実に彼ら、詩人たちの詩学の中核にあったのだ。そして、そのような自然の真実の姿は、詩 (= 絵画) の言葉で表現されることにより、初めて目に見えるようになる。そうして、＜存在 (Sein)＞の領域から、＜神々＞もたち現れては、大地を寿いでくれるだろう。Wordsworth は、Cambridge 在学時代に、居住まいの心地＜悪さ＞に一人群れを離れて、孤独の夢に耽っては、そのような＜微妙な陰影 (the shades of difference)＞を見分ける＜目＞を持ったことに感謝しながら、次のような喜びの声を上げている。Heidegger の文章の要点を実行している感すらする詩行ではないか。

I had an eye

Which in my strongest workings evermore
Was looking for the shades of difference
As they lie hid in all exterior forms,
Near or remote, minute or vast -- an eye
Which from a stone, a tree, a withered leaf,
To the broad ocean and the azure heavens
Spangled with kindred multitudes of stars,
Could find no surface where its power might sleep,
Which spake perpetual logic to my soul,

And by an unrelenting agency
Did bind my feelings even as in a chain.

(Prel. 1805, III: 156-67) [下線は筆者]

私は 私のところが最も強く働くときには、常に
外部の姿形の全てに潜んで横たわる
<微妙な陰影>すべてを求める目を持っていた、
近きもの、遠きもの、些細なもの、広大なものいづれにもかかわらず。
一個の石、一本の樹木、枯れた一枚の木の葉から
広大な海と 星たちの親しき大群できらりと光る
紺碧の大空に至るまで どこにもその力が弱まって
眠りこけるところがない そのような目なのだ。
実にこの目は、私の魂に永遠の論理を語りかけ
ある呵責ない力で
まさに 鎖で縛るように 私の心情を繋ぎとめてくれた。

私の目は、神の如き視力でもって、大地と宇宙の隅々まであまねく見渡すのであるけれど、それは、ルネサンス→Picturesque 遠近法が誇っていたような水平的なベクトルの、対象から距離を置いた、理性=科学の目ではなくて、情感という鎖にしっかりと結びつけられた、いうなればセザンヌ的な<触覚的な目>であり、その視線のなかで、私は宇宙の中心にいて、ものを見ながらも、それでもそれらとの距離はゼロ度という、水平的であると同時に垂直的な世界が、生成している。私の目は、たっぷりとそういったものの<雰囲気>に包まれながら、しかも私そのものが<場>となって、ものの生成を許容している。まさしく Heidegger の語る「四方域一天と地と神々と死すべき人間四者の世界遊戯」が切り上げられる場所となっているだろう。そして、その場所で、私は日常の狭い<自我 (ego)>を脱出しては、より大いなる<自己 (the Self)>へと転身している筈なのだ。上の詩行の直ぐあとで、このような<目>を持つ時期は誰にもあるのだと語る Wordsworth は、その時期を<神のように神々しい

時 (his godlike hours) > と形容する。それは、恐らく人間が成長すると共に、次第に衰えて行く能力であって、＜神＞であった私は、いつのまにか＜凡人＞になってしまい、世界を喪失する。言うまでもなく、これが *The Prelude* という作品の背後を貫いている論理であり、詩人を脅かしているもの、そのものだった。自然は、そのような意味でも消失して行く。

.

Wordsworth は、Rilke の言う＜解釈された世界＞を、当時流行の Picturesque-cult に見て、それを＜時代の強い感染源 (a strong infection of the age) > と受け止めては、それを揶揄する一節を書いている。目の前に存在する真実の＜自然＞の持つ力に圧倒されて、それと対比的に、いかに若い日の自らがその＜感染源＞に汚染されては、自然を見失っていたか、そのことを告白するのだ。「かつての自分がひ弱な (feeble) な存在であったのは、＜傲慢さ (presumption) > のせいだと認め」その内実を次のように語る。

.... disliking here, and there
Liking, by rules of mimic art transferred
To things above all art; but more....
.....giving way
To a comparison of scene with scene
Bent overmuch on superficial things,
Pampering myself with meagre novelties
Of colour and proportion; to the moods
Of time and season, to the moral power,
The affections and the spirit of the place
Insensible. (Prel. 1850, XI: 114-121)⁵⁷ [下線は筆者]

⁵⁷ 下線を引いた箇所は 1850 年版のテキストであり、1805 年版よりも、内実が細かく記載されているので、1850 年版を使用した。1805 年版は、一行少なく、下線部は以下のようになっている。

模倣芸術の諸規則によって

技術すべてを超えた<もの>にまで 当てはめながら
ここを好んだり あそこを嫌ったりして。しかしそれ以上に
.....

場面と場面を比較すること
身をかまけ 皮相的なものに 余りにとらわれ
色と釣り合いの 生彩のない珍奇さに
我が身を耽らせ 時間と季節の気分や
道徳的な力や 突き付けられる愛と 土地霊には
無感覚になって。

Claude-Glass を持って<自然>に背を向けながら、画面の上で遠近法的に処理しては、自然を切り取り所有する Picturesque 芸術一上の一節には、その特質があまねく語られているのであるが、現実の自然は、ブルジョア階級によって、このような形で見失われてゆく。自然事態が持っている<陰影 (chiarosucuro)>は見失われ、自然に包まれて人間の感情から進りでる筈の<時間と季節の気分>も締め出されてしまう。これまで私が<雰囲氣的>世界と呼んでいたその雰囲気が、ここでは<気分 (moods)>と呼ばれているが、同じ意味であろう。そして、Wordsworth が<無感覚>になっていたと告白している、当の<時間と季節の気分><道徳的な力><突き付けられる愛>一実は、それらこそが、<雰囲氣的な>親密な空間を形成するものであり、そしてその風土を守護するのが<土地霊>であるとの、深い認識が込められている。<土地霊>は、詩人の心に感受され、それが詩人内部の<霊>と交わり (communion)、その磁場に於いて、<聖なる>空間を誕生させるものなのである。ここで肝要なことは、Wordsworth は、そこで自然を喪失したばかりではない、そのような<汚染>が、彼の感受性 (気分) までを枯渇せしめては、自然に対して彼を<盲目>と

... to the moods

Of Nature, and the spirit of the place

Less sensible.

(1805: 161-3)

させた要因、従って、＜住む＞場所を喪失させた主要原因だということである。

このようなく汚染＞からの脱出の一つの要因が、アルプス旅行であった。1790年の8月、学生時代の Wordsworth にとって、初めて行くアルプスの峻厳な山岳は、流行の picturesque jargon では表現できないような、実に＜崇高な (sublime)＞ものであるという発見、そしてそのような jargon で＜衣装＞を身につけさせられていたモン・ブランは、逆に＜魂を抜かれたイメージ (an soulless image)＞として彼の目に焼きつくのであった。

That day we first
Beheld the summit of Mont Blanc, and grieved
To have a soulless image on the eye
Which had usurped upon a living thought
That never more could be. (*Prel.* 1805, VI: 452-56)

その日 我らは 初めて
モン・ブランの頂きを見たのだが がっかりして哀しんだ
目に焼きつくのは 魂の抜けたイメージのみ。
それ以上 ありえぬほどに 生き生きと かつては
我が思いを占領し続けていたものだった。

恐らくこの日の Wordsworth には、このようなく魂を抜かれたイメージ＞として、いわば＜欠如体＞として、モン・ブランは＜救い＞を求めていたはずである。あとの詩行では、この山そのものは名指されないが、執筆時（1804）の回想では、想像力の訪れとともに、この＜山＞が無限性と言う性格を賦与されて蘇る。そのなかに、私たちの文脈において、というか、Wordsworth の感受性にとって、重要な詩行が挟まれる。

In such strength

Of usurpation, in such visitings
Of awful promise, when the light of sense
Goes out in flashes that have shewn to us
The invisible world, doth greatness make abode.

(*Prel.* 1805, VI: 532-36) [下線は筆者]

そのような（想像力の）支配
のなかに 畏怖すべき約束を齎す
訪れのなか 感覚の光が 閃光のなかに 消えうせながら
不可視の世界を 我らに示したとき 偉大さがその住処を作っている。

<内的な目>での、世界の明察と呼んでおこう。それは、Milton 的な<盲目>が読みとる世界の真実の顕現である。世界は、詩人に<消えうせながら>その<存在>を突き付けてくるのだ。

この<欠如>の姿は、両詩人にとって、<もの>が限りなく消滅する、と言う仕方で見れる。それが、自然の<委託>の一つの現れなのである。二人の詩人にそれがどのような形で示されるのか。この<深淵>経験とでも言うべき詩行を選んでみる。

Nirgends, Geliebte, wird Welt sein, als innen. Unser
Leben geht hin mit Verwandlung. Und immer geringer
Schwindet das Aussen. (Rilke: 「第7の悲歌」)

どこにも、愛する人よ、世界は存在すまい、内部以外には。我らの生は変身しながら移ろい去る。そして外部のものは、常に次第にやせ細ってゆく。

Those obstinate questionings

Of sense and outward things,
Fallings from us, vanishings.

(Wordsworth: "Immortality Ode", 144-46)

感覚と外部の事物

我らから落ちて行くもの、消滅
に対するあの頑迷な質疑

「外部のものは、常に次第にやせ細って行く」「我らから落ちてゆくもの、消滅」
—これは如何なる事態であろうか。そして、なぜ「我らの生は変身しながら移
ろい去る」のだろうか。一見奇妙な点は、二人の詩人ともに、このような不気
味な事態に直面しながら、尻込みするわけではなく、むしろ歓迎しているとい
う事実である。

自然の姿にも、そしてそれを言い現わす言葉にしても、例の＜視覚偏重主義＞
が重く覆いかぶさっている。人間は、そのような＜視覚＞のみに依存しては、
聴覚、触覚、味覚など、一言で言えば、基本的な肉体的＜感覚＞を疎外してき
たのであった。Rilke の言う＜解釈された世界＞に於いては、＜もの＞は生身の
まま現れるのではなく、＜理念の衣＞に覆われて出現する。要するに、概念 (=
理性的言葉) として把握された世界と、主体が生身で経験する世界との間には、
埋め尽くせない深い断絶があるのだ。

G. Boehm の名著 *Paul Cézanne: Montagne Sainte-Victoire*⁵⁸ が語るセザンヌ
の＜目＞の有りようは、そのような事情をつぶさに語っている。幾つかの文章
をピックアップしてみる。

・・・セザンヌが発見したのは、認識された現実が、見られた現実と一致

⁵⁸ 岩城見一 / 實淵洋次 (訳) 『ポール・セザンヌ <サント・ヴィクトワール山>』。こ
こに、セザンヌを引き合いにだすのは、突飛なことでもなんでもない。Rilke にしても、
Heidegger にしても、自然を見る＜目＞を、セザンヌの絵画に学んだからであり、ま
た、その目は、Wordsworth にごく近い＜目＞であったからである。

しないことであった。

・・・セザンヌの経験的な自然への眼差しが彼に気付かせたことは、自然の相貌は昔から単にうわべだけを知られているにすぎない、しかし、より詳細に目を向ければ、自然は混沌として得体が知れず謎めいている、ということである。

・・・まなざしと現実との出会いは、何かを動かし始める本来的な出来事であり、この出来ごとのうちで存在するものが現れてくる。視覚データ、或いは斑点として脆く現れる現実は、絵画によって明瞭にされ、詳しく吟味され、絶えず作られ続ける。

目の前の（認識された）現実、彼の感情の裸形の〈目〉によって常に揺さぶられ、消滅しながら、その背後から本来の姿を現し、それが、絵画のなかで、明確な輪郭を伴って、実現されると言うのだ。Wordsworth と Rilke にとっても、事態は同じであると言ってよい。

現実が消滅しながら、却ってその本質を露わにしてくる。去りゆくものが、その去り行きの動きの中に、去りゆくという形で詩人を襲ってきては、本来の姿を現すのだ。その現場に立ち会う Wordsworth の表現は、Rilke よりも際立っていて、バームが名指すセザンヌの営みにより近い。〈何かを動かし始める本来的な出来事〉が、〈混沌〉と〈謎〉という形で生成しており、名指しようのない、いわば前-言語的、前-概念的（原始的と言ってもよい）な姿で立ち現われている。動詞“fall”と“vanish”を現在進行形（“falling”, “vanishing”）で使用しながら、それを名詞（“fallings”, “vanishings”=複数形）で収集・集立させる一まさに、Wordsworth 的離れ技なのであるが、このような言葉のなかで、様々に蠢くものたちが、亡霊のように現前しているのだ。前に検証した〈ポートル・セミティークの少年〉の事例を彷彿とさせないか。そして、その時に語ったル・セミティークとしての言葉の有り方が明瞭だ。この事情に関しては、更に Merleau-Ponty にも耳を傾けてみよう。

自然とはつねにわたしたちに先だって存在していたものであり、しかもわたしたちのまなざしにおいてつねに新しいものとして登場する。自然においては、現在のうちに存在する太古のものが示され、現前する太古のものの中に新しいものが呼び出されるのであり、これが「反省的な思考」をとまどわせる。この思考の前では、それぞれの空間の断片は自律的なものとして存在する。⁵⁹

Rilke が言っていた「我らの生は変身しながら移ろい去る」というその内実は、上の引用文が語っている。「太古のものが出現しては新しいものが呼び出される」時に、「反省的な思考はとまどう」のである。このように、自然の＜委託＞は、その太古のエネルギーを噴出させては、詩人の日常的な主体性を揺さぶるという形で突き付けられる。そうした中で、Wordsworth に訪れた＜太古のもの＞は、未-分節という形で分節されながら、その蠢く姿を、蠢くがままに、言葉のなかに安らわせたのである。＜言葉は存在の家＞—これは、Heidegger の公式であるが、＜もの＞と＜言葉＞は、このようにして詩的言語のなかで、その親密関係を回復し、その＜住むべき＞故郷へと回帰したと言える。これが、Wordsworth がこの不気味な事態に感謝の念を吐露した真因であり、Rilke の謂う、＜心の内部での、目に見えないものへの転身＞の真相である。⁶⁰

⁵⁹ 「自然の観念」『メルロ＝ポンティ・コレクション』171

⁶⁰ <もの>の救済。このような裸形の<目>を Heidegger は、<庇護なきもの>とよんで、今述べたことを、Rilke に関して次のように説明する。けだし、名言であろう。“Just as it is a part of our unshieldedness that the familiar things fade away under the predominance of objectness, so also our nature’s safety demands the rescue of things from mere objectness. The rescue consists in this, that things, within the widest orbit of the whole draft, can be at rest within themselves, which means that they can rest without restriction within one another. Indeed, it may well be that the turning of our unshieldedness into worldly existence within the world’s inner space must begin with this, that we turn the transient and therefore preliminary character of object-things away from the inner and invisible region of the merely producing consciousness and toward the true interior of the heart’s space, and there allow it to arise invisibly.” (PLT, 130)

VI 静寂の響き

殆どすべの〈もの〉たちから 我らの感情に向かって合図を送られる
あらゆる変化から そっと風が吹いてくる―「思い出せ」と。

そう Rilke は語っていた。自然からの〈合図〉とは、「思い出せ」という言葉であった。というか、Rilke はそのような言葉を聞いたのであった。自然からの〈委託〉はそこでは〈声〉として伝わってきたのだ。当然ここでは、先ほど見た Wordsworth の目が、肉体の目ではなく、〈内的な〉目へとその機能が委譲されていたように、今度は、聞く耳、すなわち〈内的な〉耳の純度が要求される。Wordsworth は、宇宙大を統べる〈音楽〉を聞く条件として、〈肉〉なる耳がその機能を停止するときを挙げる。

One song they sang, and it was audible --
Most audible then when the fleshly ear,
O'ercome by grosser prelude of that strain,
Forgot its functions and slept undisturbed. (*Prel.* 1805, II: 431-34)

彼らは一つの歌を歌ってた それは耳に聞こえた
この〈肉〉なる耳が その調べの より粗野な序曲に
圧倒されては その機能を失い 掻き乱されもせずに
眠る時 最もよく聞こえたのだ。

宇宙大の音楽は、耳をと通り抜けて魂の奥底まで達しては、そのなかでより豊かなハーモニーを奏するのである。詩人は、〈もの〉を救済する為には、〈目〉を研ぎ澄ますだけでなく、〈耳〉をも研ぎ澄まさなければならぬ。詩人にとって、〈見る〉ことは同時に〈聞く〉ことなのである。

Wordsworth は少年時を振りかえりながら、次のように太古から届く、ある〈言葉〉を聞く。

I would walk alone
In storm and tempest, or in starlight nights
Beneath the quiet heavens, and at that time
Have felt whate'er there is of power in sound
To breathe an elevated mood, by form
Or image unprofaned. And I would stand
Beneath some rock, listening to sounds that are
The ghostly language of the ancient earth
Or make their dim abode in distant winds:
Thence did I drink the visionary power. (*Prel.* 1805, II: 326-30)

私は歩いたものだった
大風と嵐のなかを 星明かりの夜を
静かな空の下を。そして、その時
＜形＞にも＜イメージ＞にも汚されていない
高められた気分を伝える 音のなかにある
力強いもの全てを 感じたのだった。そうして一人
岩陰に立っていると 太古の大地から届く
幽玄な⁶¹ 言葉である音、或いは遠くの風のなかに
朧な住処をなしている その音に 耳を傾けた
そしてそこから私は ヴィジョンを見る力を飲み込んだのだ。

先ほどの Merleau-Ponty の言葉の通りではないか。Picturesque 的な「反省的な思考」が＜形＞と＜イメージ＞として、＜断片的にバラバラに自立させて＞

⁶¹ Norton *Prelude* の編集者たちは、この“ghostly”に、“spiritual”と“disembodied”の両義が込められると注釈している。＜霊的＞で＜身体を離れた＝未分節の＞という意味であろう。同時に“ghastly”＜恐ろしい＞という意味も読みこまないといけないかもしれない。そのような言葉は、恐ろしいまでに少年を急襲するからでもある。なお、当時は、“ghastly”は“ghostly”とほぼ同じような意味の幅を持ち、重なりあう部分も多かった。

は、〈もの〉の姿を覆い隠していたのだとしたら、その形・姿を揺さぶるような力をもって、〈音〉が届いて来るのだ。それは、これらの形・姿に汚されない無垢の音でなければならない。従って、それは〈音〉なき<音〉なのだ。Heideggerの言う〈静寂の響き〉で、それはあるだろう。それゆえにこそ、この〈音〉の中には〈力あるもの〉が存在する。—それは、詩人の意識の中で〈太古〉から響いて来て、詩人の身体の中かで力強い反響を呼び起こす音であり、いわば Merleau-Ponty のいう〈共感覚 (synesthesia)〉的磁場において、五感全てを共鳴させる原始的な響きであろう。Wordsworthの身体全体が、エオルスの豎琴よろしく、鳴り響くのである。やがて、この声は、詩人にとって、五官をしなやかに調整して主体性を統合する〈情緒 (Stimmung)〉という意味合いを持って来る。Heideggerは、このことを以下のように説明するだろう。

The soundless gathering call, by which Saying moves the world-relation on its way, we call the ringing of stillness. It is: the language of Being.⁶² 「音のない、呼び集める呼び声、それによって〈言うこと〉がその途上で世界-連関を動かすのであるが、この呼び声を〈静寂の響き〉と呼ぼう。それは〈存在〉の言語なのだ。

難解な一節なので下記注に、斧谷氏の注釈を掲げているが、要するに、この〈静寂の響き〉とは Kristeva の〈ル・セミオティック〉と、そして Gadamer の〈背後に働く世界経験の言語性〉と呼んだものに殆ど同一のものであるだろう。そこから届いて来る〈呼び声〉は、その雰囲気的な磁場において、〈もの〉たちを同じ磁場に寄せ集めては、その途上で、世界を関連付けるのである。詩人主体の側から見れば、この〈存在〉の言語が生命力をもって己れの〈目〉と〈

⁶² *PLT*, 108 斧谷氏の丁寧な注釈つきで読んでみよう。「言葉の持つ、響くという地上的な質は、音調づけること [= 情調づけること] (das Stimmen) の中へと保存され、この音調づけることが、[天空と大地、死すべきものたちと神的なものたちによって織りなされる] 世界という接合構造 [= 世界四方域] の諸地域 [= 四方域] を、諸地域間に遊動を波及させ合いつつ [= 共鳴を惹き起こしつつ]、お互いに響き合うように諧調づける [= 調和させる] (einstimmen) ののである。」(斧谷、220)

耳>を通して注ぎ込まれ、心の深部で反響を起しては、その都度主体性の回復へ、従って、大地との調和へと調整づけられるのである。そこでは、Wordsworth が＜時と季節のムード＞と呼んだ、その＜気分＞に浸された風景が生成するのであるだろう。そして、＜静寂の響き＞から伝わる言葉が、詩的言語として結実しては、詩のなかに安らう・・・

環境保護という観点からではあるが、G. Nitschke は、日本の庭師（それも古典的、11世紀の庭師が例になっている）が、良きモデルを提供するとして、こう語る。「庭を建設するときに、彼ら（＝日本の庭師）は、その土地自身が自ら要求してくるので、まずその要求に耳を傾ける（to listen）必要があると考える」と⁶³。また、Heideggerによれば、セザンヌが「^{サント・}聖ヴィクトワール山」に面と向かう時、彼は、その山を凝視しながら、その山が語る言葉にじっと「耳を傾ける（listen）」のだという⁶⁴。恐らく、彼らの目には、視覚的風景の背後から、声なき声が、やがては言葉となって結実するであろう言葉、つまり＜言語的なものごわめき（Roland Barthes）＞が、強力な磁力を持って、届いてきているに違いない。彼らにとって、＜見る＞ことは、＜聞く＞ことなのだ。

VII 幼年時代

ここで、第V章冒頭（41ページ）で言及した幼年時代の一件に戻る。そこで私次のように、自然が変貌するいきさつを述べていた。

（1）自然は、＜ボート漕ぎ＞の少年の例でみたように、子供の感受性に不意打ちを食らわせては、その＜深淵＞から、＜存在の未知の様式＞を突き付けてくる。ここでよりリアリティーのある＜現実＞が誕生する。詩人たちの＜幼年時＞への郷愁がここにあることは二人の詩人に限っても、共通している。

⁶³ Cited in Julian Young, *Heidegger's Later Philosophy*, 107

⁶⁴ 『プレーメン講演とフライブルク講演』「画家（＝セザンヌ）が描くのは、その画家に聞こえてくる事項であって、それは、ものの本質の話しかけである。」166

そして、よりリアルな現実が誕生すると言っていたのだけれど、それはどう言うことだろうか。〈幼年時代〉という主題は、Heidegger に於いては幾分希薄な感じで、むしろ〈死に向かう存在〉として年老いてゆく大人という主題が前景化するのであるが、先に引用したことがある Trakle の詩の解説“Language in the Poem”の中で、〈子供〉を論じる一節がある。彼は、「孤独な〈隔絶された〉ところは、原初の幼年時代を大事に保護する」と言って、次のように語る。

Apartness is the gathering through which human nature is sheltered once again in its stiller childhood, and that childhood in turn is sheltered in the earliness of another beginning. As a gathering, apartness is in the nature of a site⁶⁵. 「隔絶とは、人間の本質がそれを通してもう一度、今より静かな幼年時代に庇護される〈取り集める力〉である。そしてその幼年時代は、更に別の開始の若さ（＝原初の黎明）のなかに庇護される。〈取り集める力〉として、隔絶は、ある場所の本質の中にある。」

今の〈私〉は、幼年時代から限りなく締め出され、同時に、〈子供〉の私は今は、死んでしまってここにはもういない。ここで〈隔絶〉と言われているのには、二重の意味があるだろう。〈私〉は、外部世界から遮断された孤独状態のなかで、より深く〈存在〉に開かれるということ、そして、〈私〉の幼年時代が、〈私〉から隔絶しているということ。しかし、この〈隔絶〉こそが、遙かな距離の向うからの、幼年時代から届いて来る〈静寂の響き〉を聞き届ける前提なのだ。この〈距離〉があつてこそ、〈取り集める力〉も引力を増して近寄ってくる。そうして、その〈響き〉に耳を傾ける〈私〉は、逆に幼年時代へと、そしてその向うの〈場所〉＝〈存在 (Sein)〉へと開かれてゆくのである。

Wordsworth にとって、〈幼年時代〉は人間の〈高み (Height)〉にある時代であり、『序曲』では、その隔絶された場所を聖域として寿ぐ詩行には事欠かない。今、一か所のみ、引いておこう。幼年時代の読書経験がいかに生きた自然

⁶⁵ WL, 185

を見る心を育てるか、そのような一節で、こう語る。

Our childhood sits,
Our simple childhood, sits upon a throne
That hath more power than all the elements. (*Prel.* 1805, V: 531-33)

我らの子供時代は
我らの素朴な子供時代は あらゆる元素 (= 自然) よりも
もっと強い力を持った 玉座に座っている。

子供は大きく自然に開かれており、想像力豊かな存在で、自然の4大元素をも解体=構築しては、新たに次元を押し開く存在なのだ。今は、あらゆる人間たちの置かれた位置より高い＜玉座＞が彼の存在場所であることを確認しておこう。これは、Rilkeにも繋がる筈だ。⁶⁶

Rilkeは、ある時、憂いに満ちた＜郷愁＞の言葉で、一見異様な発言をしている。

Once we were children *everywhere*, now we are children just in one place...⁶⁷

「かつては我らは、いたるところで子供であった。今、我らは、一か所でのみ子供である。」[強調は、Rilkeのもの]

Paterでもいい、*The Waste Land*のEliotでもいい、「大人になった私たちは、牢獄に閉じ込められて、その牢獄の＜鍵穴＞から、外部世界を除き見しているだけだ」と言うかもしれない。それが＜一か所＞とRilkeが語る大人の世界、子

⁶⁶ Cf. "Childhood is a special time for Rilke, a time gone by that contains within itself a time to come." Detsch, 36

⁶⁷ AAP. 316

供は、そのような<牢獄><鍵穴>も知ることはない。言うまでもなく、その<牢獄>を抜け出して、開かれた世界へと出で立つこと、それがロマン派の想像力の営みであるが、この点については、Jonathan Bate は信頼をもって、Rilke をロマン派に連なる詩人と確信している。

With this ambition, Rilke remains in the mainstream of Romanticism.⁶⁸

Rilke にとっても、幼年時代は、Wordsworth のそれと同じように、<存在の高み (Being's height)>にあって、<魂の無窮性 (Soul's immensity)>⁶⁹をもった存在であり、限りなく世界へと開けた存在であった。Rilke にとっても、<自然の声>は、その<いたるところにいた子供>の世界から届いて来る。

O Stunden in der Kindheit,
da hinter den Figuren mehr als nur
Vergangnes war und vor uns nicht die Zukunft.
Wir wuchsen freilich und wir drängten manchmal,
bald groß zu werden, denen halb zulieb,
die andres nicht mehr hatten, als das Großsein.
Und waren doch, in unserem Alleingehn,
mit Dauern dem vergnügt und standen da
im Zwischenraume zwischen Welt und Spielzeug,
an einer Stelle, die seit Anbeginn
gegründet war für einen reinen Vorgang. (「第4の悲歌」)

おお 幼年時代のもろもろの時よ。
形象の背後には単なる過去以上のものがあり

⁶⁸ *The Song of the Earth*, 263

⁶⁹ この二つのフレイズは、いずれも “Immortality Ode” から。

我らの前にあるものは未来ではなかった 諸々の時よ。
なるほど、我らは成長してきた、そして時々は
我らは 大人になるために急いだ 半ばは 大人になること以外に
何も後に残さない人たちを喜ばすため。
しかし 一人になると 我らは 永遠性なるものを
たのしんだ そこに我らは立ったのだった
世界と玩具の間の中間地帯に。
まさにそもそもの最初から 純粋な出来事 (einen reinen Vorgang) の
ために
確立されていたあの場所に。

振り返れば、あの「永遠」ともおぼしき幼年時代、そこでは過去も未来もなく、溢れんばかりの＜今＞で充満していた世界—神々の明るい光で隈なく照れされていた空間—そこでは、＜純粋な出来事＞、世界が開闢する瞬間に立ち会うという出来ごと、＜ボート漕ぎの少年＞に訪れたあの出来ごとがあった場所なのである。

こうして自然からの＜委託＞は、今まで見て来たように、外部風景からの＜目＞と＜耳＞に届く＜合図 (Wink)＞として詩人に届くのであるが、その背後には、というより、本質的には、その外部風景とより密接に関連していた、あの幼年時代からの＜雰囲気＞を伴った合図として届いてくるのである。そしてそれに対する＜郷愁＞が詩人の想像力の原動力になる・・・

この＜見る＞ことと＜聞く＞ことの合流—言うまでもなく両詩人に類出する感覚であるが、ここで Wordsworth が集約している一か所を取り上げて、詩人にとっての幼年時代の真意を確認したい。*The Prelude* (1805) 第5巻は、言語が真の経験を言い当てることができるか否か、いわば Wordsworth の言語的危機（そしてそれからの回復）を詳述する巻であるが、その冒頭に、次のようにそれまでの経験を集約する詩行がある。

Hitherto

In progress through this Verse, *my mind hath looked*
Upon the speaking face of earth and heaven
As her prime teacher. (*Prel.* 1805, V: 11-13)

これまで、
この詩（『序曲』）の進行中に、私の心は
大地と天の語りかける顔を見て来た
心の大事な教師として。

繰り返し、繰り返し営まれては、似たような表現が山積みしている Wordsworth にあって、この詩行は、ある意味では既に陳腐の域を出ない表現かもしれない。しかし、ここには、日常の論理的・概念的な思考からは脱落してしまっている、ある真実、ある生きたリアリティーの世界の存在が語られている。〈私〉が見るのは、肉眼の目によってではなくて、〈心 (my mind)〉によってであり、また同時に、見られている対象である大地と天は、〈語りかける顔 (“the speaking face”)〉を装っているのだ。詩人には、大地と天も、生命を持つものとして受容され、同時に人間的な形姿を装っている。そして、それは語りかけるのである。詩を読む私たちにとって、どこにでも転がっているような、変哲もない詩行のようだけれど、そうして、もとよりこの詩行はそれまでの前ル・セミオティック-言語的、前概念的な体験が、概念言語へと翻訳され、抽象的なベクトルに置かれた、ある意味では原初の雰囲気^{ル・セミオティック}を捨象した、薄っぺらな言葉になってしまった感はあるものの、実は、この詩行にはそれまでの同種の経験の多くが凝縮する形で分厚く埋め込まれている詩行でもある。従って、このことを、安っぽい擬人法として一蹴することは出来ないだろう。18世紀の安易な抽象的言語としての擬人法⁷⁰と受け取れば、私たちは、その生きた世界を見失うことになってしまいか

⁷⁰ 「*Lyrical Ballads* 序文」の一つの目的が、18世紀の抽象的擬人法を廃絶することにあった。Thomas Grayの詩を例にあげて説明しているが、その内実は、擬人法が〈もの〉と〈言葉〉の乖離を促し、生きた世界を締め出して仕舞うということにあった。

ねない。この詩行の重さは、人間の先祖が経験し、そして我々の幼年時代が受け継いでいて、そして成長するとともに失ってしまう、そして科学万能の現代人が忘却してしまった、ある感受性の秘密を言い当てている。その感受性が誕生させていたのは、例えて言えば、そこに生命が充満するアニミスティックな世界であり、ギリシャ神話その他の神話における神々の生誕の現場なのだ。また言語的に言えば、＜ボートを漕ぐ少年＞の一例でも見たように、優れた意味での Metaphor の発生現場のことである。ここでは、斧谷彌守一氏が説明される「隠喩発生の現場」についての考察に耳を傾けよう⁷¹。それはごくありふれた、言って見れば誰にでもあるような、ある3歳の女の子の体験をもとに説明されている—

3歳の女の子が＜夜の海に夜光虫がキラキラと光っている＞のを見ながら
言う—

＜あれはねえ うみのおほしさまだよ＞と。

その子の前に現前しているのは、大人の論理的思考では把握できない、みずみずしい前-言語的リアリティーの世界であり、＜夜光虫のキラキラ＞と暗い夜空に輝よう＜星のキラキラ＞が、論理的な同一性ではなくて、＜雰囲氣的同一性＞のもとに集められて、世界を誕生させているのだ。こうして、夜光虫には聖なる＜星＞の聖性が付与され、同時に＜星＞は夜光虫のような生命を持ったものとして感受されては、この子の世界が押し開かれ、この新たな世界の創造者として、その中心に位置をしめ、現場に立ち会っているのである。Wordsworth ならば、この子は、日常とは異質の世界、＜存在の未知の様式＞に立ち会い、その現れの現場で存在することに驚愕し、その故に歓喜に溢れている、ということだろう。3歳の子は、そのことを、ごく日常の素朴な形で示しているのである。Heidegger の言う＜存在＞に対する原初的な名付け行為なのである。恐らく、この3歳の子は、紛れもなく＜もの＞に名前をつけて、＜もの＞

⁷¹『言葉の二十世紀』143-4、以下、本文は、氏の説明に少し耳を傾けて行く。

を生成せしめたと言える。そして、そのような言語現象のもとで、彼女には、彼女のいる場所が日常の平板な世界とは異なる、何か異質の、あたかも透明な厚みを持っているかのような世界となって現れている筈だ。

Wordsworth に目を写してみる。彼が、母親に抱かれた幼児 (“infant Babe”) に最初の “Poetic Spirit” が誕生する現場を見ている次のくだりは、この女の子が置かれた状況とよく似ている、ただ、大人としての詩人の理性的な分節が施されているのであるが。

— his mind,

Even as an agent of the one great mind,
Creates, creator and receiver both,
Working but in alliance with the works
Which it beholds. Such, verily, is the first
Poetic spirit of our human life. (Prel. 1805, II: 271-276)

彼 = 幼児の心は
まさしく一つの偉大な精神の行為者として
創造者と受益者となって、創造するのだ。
己れが見る (自然の) 作品と
共同して働きながら。まさしくそれこそ最初の
我ら人生における、詩的精神なのである。

この詩的精神は、<神の作品>である自然から靈感を授かりながら、その生命に合流しては、己れと自然との間に<第三の現実>を創造して行く。生命と血の通う現実を。外部の風景が詩人の心深くにまで貫通していて、詩人の自己がそれによって触発されながら、世界へと開かれている状況を言っている。大地は、恐らくこのような<詩的精神>によって救われる。

ここでもう一度3歳の女の子に戻るけれど、言うまでもなく、この子が成長するにつれて、このときに発生した隠喩的世界は、単なる言葉の彩 (文彩 =

figure of speech) としての隠喩となって枯渇して行き、＜夜光虫＞と＜星＞は別々のカテゴリーに組み込まれることになるだろう。斧谷氏は、そこでこの女の子は Metaphor の世界から決別して、今度は Simile (直喩) の世界へ抜け出すのだという。つまり、両者が別々の範疇に組み込まれて、

＜あれはねえ、うみのおほしさまみたいだね。＞

と変形してゆくのだと。前 - 言語的な＜ル・セミオティック＞の世界から概念的な＜ル・サンボリック＞な世界へと成長して行く、ということでそれはあるだろう、明らかに、幼いころの世界を失うことと引き換えに、彼女は成長してゆく。

そして、ここで、上に引用した Wordsworth の詩行が、完了形で語られていたことに注意しよう。

My mind hath looked

Upon the speaking face of earth and heaven.

この完了形は、*The Prelude* 第5巻の文脈においては、何か消え去りつつあるものに対する未練のような、憂いのような響きを持っている。実は、この文脈は、女の子が持っているような、そして言及した幼児 (“infant Babe”) が持っていたような、そのような幼児的な感受性が失われつつあること、その中で言語と＜もの＞が乖離してゆく過程を認識し失意に陥る、そして大地が失われるのではないか、という文脈での発言⁷²であって、Wordsworth (そして Rilke) が、そこから逆照射する形で炙り出す「幼年時代」の意義は、そこにある。恐らく「幼年時代」の感受性が、大地を救うのだ。

従って、住むべき大地の喪失とは、二重の意味を持っているだろう。彼が置

⁷² この *The Prelude* 第5巻は、大きく見れば、詩的言語論と見てよい。冒頭の Arab-Quixote の夢は、「夢」に託して、Metaphor 発生の現場を確認することであった。

かれた現実のゲゼルシャフトへと移行する過程にある時代的・環境的な状況と、Wordsworth 個人史の両方のなかで、大地は恐らく〈痕跡〉という形で、救いを待っているのだ。彼のなかでは、自然が語る〈声〉とは、それら両者から矢で射られるような痛みと疼きを伴いながら彼のもとへとやって来る。それは消失しつつあるがゆえに、深い悲しみ (melancholy) を宿した声、いまだ分節されざる非 - 分節の言葉としてとして届いてくる。今、典型的な形で現れる二箇所のみ、指摘しておこう。

- (1) スケート遊びの少年の心に届いた遠くの丘からやって来る音。

An alien sound

Of melancholy, not unnoticed. (*Prel.* 1805, I:470-1)

- (2) 先ほど (53 ページで) 引用した一節。

Sounds that are

The ghostly language of the ancient earth.

「気がつかれていなかった訳でもない、異界から来る憂鬱な音」「古代の大地から届く幽玄な⁷³言葉である音」—そういう言葉を彼は聞いたのであるが、どういことであろうか。それは、先ほどの3歳の女の子の例と同じように、幼児の頃、みずみずしく生誕していた〈世界〉を名指した言語が、成長するにつれて次第に概念的・論理的な言語へと変貌しては、言葉そのものが持っていた生命を失ってしまう、それは同時に、〈原初的な〉大地そのものをも失ってしまうのと同じ—そのような不安の思いが Wordsworth 少年の心に生じていることを意味している。消滅しつつあるがゆえに、心が弛緩したようなあるふとした瞬

⁷³ Norton Prelude の編者たちは、この“ghostly”が二重の意味 (“spiritual” と “disembodied”) を織り込んだものであると指摘する (p. 82) が、正しい指摘だ。もうひとつ、それに「幽霊のような」という不気味な意味も私はつけ加えたい。いずれにしても、意味として結実する前の、〈もの〉から遊離した (disembodied)、シニフィエに直結しないシニフィアンのごわめきの現場である。

間に、圧倒的な威力をもって、少年に襲いかかると言ったら適切か。そのような形で、少年に原初的な世界が垣間見えている。ゆえに、それは＜異界＞から、一度は＜気付かれた＞という痕跡を残しながら、従って＜憂鬱な＞音をたてて、＜古代の大地＞から＜亡霊のように＞届いてくるのだ。この＜亡霊のような (ghostly)＞には、先の脚注 (61) で、Norton *Prelude* 編集者たちの解釈—“disembodied” なる解釈を示して置いたが、未分節のままの、＜シニフィエ＞を欠いたシニフィアンのまま、という意味にも理解することが出来る。このような形で、未分節の原初的な＜言葉のざわめき＞は、未分節のままに＜もの＞を受肉して、得体の知れない＜あそこ＞をそこに現前させているのだ。これが、Kristeva の＜ル・セミオティック＞の領域なのだ。詩人たちの＜幼年時代賛美＞の内実はここにある。あくまでも得体の知れないノスタルジックな、＜夢想＞の領域に幼年時代が存在するのではなしに、生きた＜言語現象＞の世界として存在している。

これが Wordsworth にとっての自然から詩人に委ねられる自然からの＜委託＞の内実であり、果たすべき仕事なのである。Wordsworth の＜記憶＝回想＞行為の中核にあるのは、突き詰めれば、その始原の言語の回復に他ならない。この章の冒頭近くで言及された “the speaking face of earth and heaven” の中の＜顔＞は、そのようなことを詩人に＜委託＞しており、Heidegger が言うように、そのような自然の声に＜名前をつけ＞なければならない、それが＜存在の牧羊者＞としての詩人に与えられた仕事なのである。Wordsworth の詩のなかで、＜力＞溢れる場所はどこかと問われれば、それは言うまでもなく＜時の諸点＞という抒情的瞬間なのであるが、この場所を生彩あらしめているものは、ざわめきとして世界を言い現わした言葉の新鮮さ：＜夜光虫は海のお星さま＞という隠喩的世界が、＜夜光虫＞と＜星＞へと概念化して分化する、その枯渇化の途上であって、もともとの新鮮さが強力な磁場を形成しながら、垂直的に噴出してくるダイナミックな現場だからである。Heidegger は言う。

人間が言葉の主人であるのではなく、逆に言葉が人間の主人である。
言葉は＜言葉している＞。

と、一見奇妙な言い方を繰り返すが、それは、今のような事情をさしているのだろう。

Wordsworth にとっての幼年時代から届くざわめきを—それは同時に<住むべき>故郷から届く響きでもあり、Wordsworth の詩のなかに、常にすでに<言語論>が充満しているのはそのためである。彼の詩は、その意味で<言葉>を問題とし取り扱う、近代的・現代的な優れた意味での“Meta-Poetry”と言える。⁷⁴

.....

西洋近代が無視してきた自然の<影>、<解釈された世界>において消滅しつつある<もの>—それらは、このようにして存在感を回復され、その陰影が<雰囲気>空間として新たに生成する。そうして、それらが、<表層のテキスト>の背後から、下側から、垂直的に突きあげる形で、<生成テキスト>の形で生命を与えられる、そのようにして<もの>は<言葉>のなかで安らぎを手に入る。そうして大事なことは、それらが詩人の作品のなかで死滅してしまうのではなしに、詩と言う言葉の網目編成に組み込まれて、常に<生きた>作品として、読者をゆさぶるのだ。そこには、詩人の経験した<雰囲気>空間がいつも生成する。この点を、T. S. Eliot は、“syllables and rhythm”という観点か

⁷⁴ Wordsworth と Rilke は特に<見ること>と<聞くこと>が前景化されている詩人であるが、この<目>と<耳>は、勿論相互に交流していて切り離すことは出来ない。メルロ＝ポンティが語るように、我らの身体は世界と同じ「生地」で織られており、この世界の肉に包含され、またそれを包含する形で生きている。彼が「共感覚 (synesthesia)」と呼ぶ、五感の交差配列のなかで、我らは生を送っているのであり、特に詩人は、その傾向が強く、言うまでもなく、「死せる」世界の<救い>はそのような感覚に委ねられる。Wordsworth が自然に対峙するとき、例えば、

Now all eye,

And now all ear, but ever with the heart

Employed, and the majestic intellect (*Prel.* 1805, 11: 143f.)

という五感を全身で働かせるというとき、また、Rilke が、「five levers が同時に働くときに完全な詩が完成する」というのも同工異曲である。“The fully achieved poem can arise only on condition that the world, *acted upon simultaneously by all five levers*, appear in a particular form on the supernatural level which is, in fact, the level of the poem.” (*AAP*, 301-2) 従って、そこに誕生する作品は、例えば<見て><聞く>人セザンヌの作品が「まるで盲人が書いたような<触覚的世界>を見る」ような状況にもなるのである。

ら、＜聴覚的想像力＞と命名して次のように語るが、同じ事態を言い当てているだろう。

What I call the “auditory imagination” is the feeling for syllables and rhythm, penetrating far below the conscious levels of thought and feeling, invigorating every word; sinking to the most primitive and forgotten, seeking the beginning and the end. It works through meanings, certainly, or not without meanings in the ordinary sense, and fuses the old and obliterated and the trite, the current, and the new and surprising, the most ancient and the most civilized mentality.⁷⁵ 「私が＜聴覚的想像力＞と呼ぶのは、シラブルとリズムへの感情のことであり、思想と感情の意識的なレベルの遥か下まで貫いて、あらゆる言葉を活気づける。最も原始的で忘れ去られたものへと沈み行き、原初と終末を求める。確かに、そしてそれも日常の感覚での意味も携えないわけでもなくて、それは意味を通して作用する。そして古いもの、滅却されてしまったものと些細な事物、流行のものと融合させ、新しきものと驚異的なものを融合させ、最も太古的な心性と最も文明化された心性とを融合するのだ。」

これが、Wordsworth と Rilke の最も良い詩を特徴づけている性質であることについては、言葉を要さないだろう。彼らの詩の中から、原始的で忘れ去られていたものが、溢れだし、新たなものと融合する。しかも、「日常の感覚の言葉」で語られているにも関わらず、その言葉が原初的でとも称すべき、分厚い層の世界を孕ませては、現代人の心の底まで貫通するのである。ここで冒頭の Rilke 詩に戻ろう。

大地よ、お前が望むものは、まさにこれではないのか、目に見えず

⁷⁵ *The Use of Poetry and the Use of Criticism*, 256

我らのなかで立ちあがること？ いつの日か目に見えなくなることが
お前の夢ではないのか？ 大地よ、目に見えなくなることが。
もし轉身でないとしたら、お前の緊急の委託とは何だろう？
大地よ、我が恋人よ、私は その委託を果たそう。

大地の〈夢〉、〈目に見えなくなる〉という〈願い〉とは、それらが、当初の生命を失わずに、あの3歳の女の子の場合がそうであったように、〈もの〉とその〈もの〉が醸し出す雰囲気を分泌するような、詩的言語のなかで生きながらえること、それである。そのためには、言語が決して生命を断たれた概念的な言語になり下がることは許されないのだし、或いは言い方を変えれば、〈もの〉との連携を失ったようなアレゴリーとなってしまってもいけない。真に大地の生命に通底する〈受肉〉された言語で寿がれながら、意味連関の網目のなかで、命脈を保ち続けること、その〈言葉〉のなかでは大地は〈死んで〉〈不可視の存在〉になってしまうのは言語の持つ宿命であるが、そこから発生する意味は、そこで立ちあがるイメージと一緒にあって、決して死ぬことはないこと、そのようなことなのだ⁷⁶。

VIII <受肉>言語

これまで幾度も、〈受肉〉言語という表現を使ってきた。それは後に上げる Wordsworth の名高い一節からの盗用なのであるが、ここで Foucault にも耳を傾けて、詩的言語が 19 世紀当初から、如何なる変容を被ったか、その一端を垣間見よう。

From the nineteenth century, language began to fold upon itself,

⁷⁶ 上田閑照氏がこの事情をうまく説明されている。「言葉は〈こと〉をあらわしつつ、〈こと〉のあらわれの背後に消えるのではなく、却って言葉として留まり言葉のなかに〈こと〉を保っている。しかも〈こと〉は言葉ではない。言葉のあらわす〈こと〉である。…ここに、言葉においてのみ開かれる独特な〈言葉の世界〉がある。…これを〈虚のこと〉と名づけたい。」 上田『言葉』23-4

to acquire its of its own particular density, to deploy a history, an objectivity, and laws of its own. It became one object of knowledge among others, on the same level as living being, wealth and value, and the history of events and men.⁷⁷ 「19世紀から、言語はみずからに折り重なり、己れ自身の特別な濃密さを獲得し、ある歴史を展開し始めた。

一つの客観的実在となり、己れ自身の法則となったのだ。それはとりわけ知識の対象となった。それは、生きた実在と富と価値と同じレベルでそうなのであり、出来ごとと人間を語る歴史となった。」

この言葉の中に、真の意味で19世紀初頭から20世紀に至る言語観が要約されているだろう。特に道具的な情報言語、＜衣装＞としての言語が加速度的に成長してゆくその裏側で、背後から言語の生命を支えている文学の言語、それは今 Wordsworth で見たような、世界の諸々の営みを受肉させては、それらの世界をたっぷりと懐胎させ、その世界を新たに誕生させるような、分厚い言語のことである。Rilke は、詩的言語を＜植物＞に類比させながら、次のようなことを言っている。

人は時々、言語の外的な行動に調和せず、その内部の何か、を欲しがることがある。それは、内奥の言語、言葉の核のような言語、茎から、上から摘み取られる言語であり、言語の種子として集められる言語である。太陽への完全なる賛歌は、このような言語で構成されるのではないだろうか。愛の純粋な沈黙は、そのような言語＝核 (language-kernels) のまわりにある心＝土壌 (heart-soil) ではないだろうか。⁷⁸

植物は、花を摘まれても残った部分は今なお、しっかりと空に向かって背伸び

⁷⁷ Michel Foucault, *The Order of Things: An Archaeology of the Human Science*, 296

⁷⁸ AAP, 591-2

をしながら、しっかりと大地に根付き、大地に抱かれている。先端のところで摘まれた〈花〉、それが、〈概念〉や〈情報言語〉のことであり、やせ細った〈言葉〉でも、その背後にはたつぷりと大地を抱え、言葉の〈核〉を温存しているのだ。これが Foucault の言う、19 世紀以来の〈自らに折り重なる言語〉の実態だ。Wordsworth の定義に進もう。彼は明確に、“Incarnation” なる後を使用するが、それは、決してキリスト教の教義⁷⁹にあるような “Incarnation” ではなくて、今述べたような〈もの〉と〈言葉〉の生命の通い合いという意味で使用している。⁸⁰

彼は 18 世紀的な道具的言語観を〈衣装言語〉と称して退け、〈受肉言語〉と対比して次のように述べる。

Words are too awful an instrument for good and evil to be trifled with: they hold above all other external powers a dominion over thoughts. If words be not ... an incarnation of the thought but only clothing for it, then surely will they prove an ill gift; such a one as those poisoned vestments, read of in the superstitious times, which had power to consume and to alienate from his right mind the victim who put them on.⁸¹ 「言葉は善にも悪にも、余りに恐れ多い道具なので、軽い気持ちで弄ぶことは出来ない。言葉は、あらゆる外

⁷⁹ やがて、Wordsworth にとって、〈受肉〉は大きくキリスト教的方向に向かってゆくのだが（そして大地を失うに至るのだが）、そこまでは、今は立ちらない。

⁸⁰ Michael Bell は、Rilke と Lawrence を引き合いに出し、彼らの言葉が、Heidegger の言語論に通底する質のものを見ている。その Heidegger の〈言葉〉とは「目に見えない身体、しかもその暗黒の面は知ることの出来ないような身体によって背後から支えられている、計り知れない表面 (an inscrutable surface)」なのであり、これは今述べた Wordsworth、Rilke の言語論と質を同じくしている。“The Metaphysics of Modernism” in M. Levenson ed. *The Cambridge Companion to Modernism*, 18

⁸¹ “Essays upon Epitaphs III,” *Wordsworth Literary Criticism*, 54. なお、この〈道具言語〉が実は近代史を貫いており、現代では情報言語 (Information Language) として氾濫していること、それも Heidegger の嘆きの一つである。このような形で、〈もの〉は失われているのだ。

部の力あるものに優って、思考を支配しているものなのだ。もし言葉が、思考の＜受肉＞でなく、それを包む単なる＜衣装＞であるとしたら、その時は確実に、言葉は悪しき賜物となるだろう。かの迷信的な時代に読まれた、あの毒を盛られた衣装のようなものになり、それを身に着けていた犠牲者を、消耗させ、正しいところから逸脱させる力を持っていたような。」

Heidegger は Hölderlin 論で、＜言葉は危険なもの＞という解釈を打ち出すのであるが、その趣旨は、この Wordsworth の言語論と軌を一つにしているだろう。

ここで、つけ加えておけば、＜ものの生命＞と＜言葉＞が受肉した瞬間は、Rilke の次の詩行にくっきりと描かれている。

Bringt doch der Wanderer auch vom Hange des Bergrands
nicht eine Hand voll Erde ins Tal, die Allen unsäglichkeit, sondern
ein erworbenes Wort, reines, den gelben und blaun
Enzian. (「第9の悲歌」)

しかし、放浪者は、また、尾根の斜面から、言葉になりえぬ
手一杯の土を谷間に持ってくるのではない。彼が持ち帰るのは
獲得した純粋な一語、すなわち黄色に青に咲く
リンドウなのだ。

「リルケが暗示するのは、言葉が、丁度花が大地と関係を持っているように、指示された＜もの＞と関係があるということだ。放浪者は、不毛な山の一握りの豊かな土を発見したあと、下にいる人のために、その土の存在を確信させるためにそれを持ちかえったりしない。その代わりに、彼は一本の花を持ちかえる、それが十分な証拠となるのだが、それは、言葉と同じように、そこからそれが生じてくるものの、十分な、完全な美しい象徴的な表現である。」⁸² 登山者は、

⁸² Stanford, *Landscape and Landscape Imagery in R. M. Rilke*, 148

山から言葉を持ちかえる。ここに紛らわしいまでに曖昧に、しかしくっきりと、描かれる<リンドウ (Enzian)>は、現実の花であると同時に、言葉としての<花>であり、花をたっぷりと受肉した上での<純粋な>言葉である。従って、この<リンドウ>は有りふれた、人目につかぬ一輪の花ではなくて、詩人に<名指されて><存在>を獲得した一回きりの花でなければならない。そうして、この<リンドウ>という名は、<リンドウ>そのものだけでなく、山の土も尾根の斜面も、それから登山者が目にしたであろう、空や麓の畑など、様々な風物などが、一緒に安らう<場所>となっている。言うまでもなく、それらは、詩人の心のなかで<住処>を見つけて、安らっている筈だ。

それでは、このようないわば、詩人の極めて個人的な詩的体験が、いかにして「共同体」にとっての<住むべき>場所設営の運動と連携して行くのか、広い意味でのエコロジー運動に繋がってゆくのか、そこには、人類共通の宿命である<死>という経験が介在する。詩人たちが、真に<死を能くするもの>へと転向してゆく時、<聖なるもの>と<神々>の目配せに触れながら、Heideggerの言う「四方域」へと世界が拡大されては、共同体の命運を呼び起こすことになって行く。この点、後の課題として保留しておき、<住むこと>に関して多くの思索を巡らしたHeideggerが、アフォリズム形式で、<詩作?>の実践を行っている、その<詩的实践>の現場を検証して論を閉ざしたい。

IX 素朴なものの輝き

<もの>は言葉の中に安らう。失われつつある<もの>は、詩の中で己れを取り戻す。<言葉>と<もの>は、そこで蜜月関係を維持するのである。Wordsworth、RilkeそしてHeideggerは、常に既に、我が俳句に近い位置にいる。T. S. Eliotが、<感受性の分離 (the dissociation of sensibility)>を唱えた時に、それは明確にDescartes的<主>と<客>の大きな分離、従って<唯我論 (solipsism)>に至る、従ってまた<もの>の喪失に至った陥穽のことを突いていた。そこで彼が提示するのが、<客観的相関物 (objective correlative)>⁸³

⁸³ 「我々がエリオットのこの考え (=客観的相関物)に興味を持つのも、もともと日本の

であったのは周知のこととして、初期の Wordsworth の詩（特に *The 1799 Prelude*）は、裸形のままに己れの体験を提示するという仕方で、後期の回りくどい（時には、退屈な）「説明」もなく、将に、その＜客観的相関物＞の提示をこととしている⁸⁴。また、Rilke を詩の世界に開眼させた要因の一つに、我が俳句があったし、後期 Heidegger も、俳句を含めた東洋の世界へ接近しているのは言うまでもない。

その Heidegger に、俳句めいた一連の詩（の如きもの）がある。それは、紆余曲折をたどり、饒舌な、いつまでも言葉が途切れることのない彼の常の文章に相反するような、まるで日本の俳句を思わせる詩作＝思索（群）である。詩として見れば、確かに哲学者のぎこちない詩作には違いなく、また、Heidegger 自身も「詩ではない」と断っているのであるけれど、それだけ却って、俳句の営みを、従って Wordsworth と Rilke の営みを、炙り出してくれると思われるものでもある。それは、“Aus der Erfahrung des Denkens”（「思惟の経験から」）と題された思索＝詩作群であるのだが、ここで、その一篇だけを取り上げてみる。

Wenn im Vorsommer vereinzelt Narzissen verbor-
gen in der Wiese blühen und die Bergrose unter
dem Ahorn leuchtet...

Die Pracht des Schlichten.

Erst Gebild wahrht Gesicht.

Doch Gebild ruht im Gedicht.

叙情の伝統は、客観的相関物の洗練の歴史だったからである。エリオットが客観的相関物といわなくてはならなかったところを、俳句があっさりと、花鳥風月で片付けたのは、いかにもしゃれている。」（外山『修辞的残像』205）

⁸⁴ この点に関しては、Stephen Prickett, *Wordsworth and Coleridge: The Lyrical Ballads*, 54 が詳述している。

Wen könnte, solange er die Traurichkeit meiden will,
je die Ermunterung durchwehen?

Der Schmerz verschenkt seine Heilkraft dort, wo
wir sie nicht vermuten.⁸⁵

自然の事物がその本来の姿で立ち現われる瞬間を寿ぎながら、その時の詩人の
実存的なありようをつぶさに語っている詩である。1節ずつ、検討してみよう。

Wenn im Vorsommer vereinzelt Narzissen verbor-
gen in der Wiese blühen und die Bergrose unter
dem Ahorn leuchtet....

初夏の日に 孤独な水仙が
牧場のなかで ^{ひそ}密かに花咲かせ
ハンニチバナが ^{かえで}楓のもとで ^{きらめ}煌くとき・・・

Die Pracht des Schlichten.

素朴なもの輝きよ。

<水仙>も<ハンニチバナ>も<牧場><楓>も、ありふれた、何気ない風景
として、前々からそこに存在していたに違いない。しかし、何気ない一瞬に、
私のなかに、いわば<神の閃光 (辻邦夫)>のようなものが貫いて、眼前の風景
を一変させて<煌めかせた>に違いないのだ。この<閃光>を、芭蕉ならば<
もの見えたる光>と呼ぶだろうが、それは<対象>を照らす光であると同時に
に、<私>のなかに生起する光でもあり、<主>と<客>を貫く閃光でもある

⁸⁵ Heidegger, *Aus der Erfahrung des Denkens*, 79

だろう。かくして、それぞれの＜素朴なもの＞が＜輝き＞に包まれ、同時に、風景・雰囲気全体が＜素朴なものの輝き＞の中にあまねく浸され、輝きを放つのである。＜言葉＞が、＜もの＞を現前させているのだ。また、芭蕉は、上の句のあとに、＜消えざるうちに言いとむべし＞なる言葉を継いでいる。何気ない日常の言葉が、繰り返し繰り返し使用され、例え完全に擦り切れていたとしても、その同じ語が、ある瞬間絶対とも言える重さを担って、新たに誕生する瞬間がある。それが、芭蕉の俳句の試み⁸⁶であるのだが、Heideggerの詩に於いても、この瞬間に名指された言葉によって、例えば上に列挙した＜水仙＞という一語とっても、絶対的な一回限りの重さを担って、＜水仙＞という言葉の中に、よりリアリティーを持った水仙が生起するのだ。いわば、現実の花は背後に限りなく消えさりながら、余計にそのリアリティーを突き付けてくる。私たちは、Wordsworthの例えば、「黄水仙（“The Daffodils”）」という詩を思い出さないか。

上に引用した詩＝文章には、更に、次の3つ節が続いている⁸⁷。最初の2行は、今述べたことを集約的に凝縮した言葉であろう。

Erst Gebild wahrht Gesicht.

Doch Gebild ruht im Gedicht.

⁸⁶ 例えば、高橋英夫氏は、『ミクロコスモス - 松尾芭蕉に向かって』のなかで、次のように詳述されている。「言語の絶対性というものは存在する。しかしこの絶対性とは、言語の相対性を許容し、そこを通過することによって成立するものである。一般化していうと、芭蕉の一字一句がもはや動かせない、唯一絶対のものだと思えるときがあるのは、言語的な振幅がそれ以前においてたえず起こっていたからに他ならなかった。揺れ定まらぬ言語というものの特性を知悉して、相対的表現の世界をさすらった経験こそが、芭蕉に、絶対言語という、もしかすると完全には意識化されるには至らなかった様式を可能ならしめた、と思われる。」49

⁸⁷ もしHeideggerがこれを俳句（の試み）と考えていたら、これ以下の3つの節は余計であろう。Wordsworthに対しても同じことが言えて、湧きあがるイメージのみを＜客観的相関物＞として提示するだけでは済まずに、説明を加える誘惑を押しとどめきれない、そのような傾向のことだ。なお、ここでは具体的に触れる余裕はないが、Rilkeには名高い『薔薇』その他、俳句めいた短詩は多くある。

^{ゲビルト}心像のみが ^{ゲシッヒト}その顕れを 保持する。

しかし心像は 詩のなかで安らう。

ここで、Heidegger のギリシャ的なく心像 (Gebild = Image) >理解の仕方に言及しておくのも参考になるだろう。彼は言う。

「詩的イメージとは・・・単なる幻想や幻影なのではなくて、異界のもの (the alien) を、親しみ慣れた光景のなかに、目に見えるように取り込んだ想像の働き (imaginings) のことである。イメージを詩的に言うことは、神々しい現れの輝きと音を終結させ、異界のものの暗闇と沈黙と一体化することである。そのような光景によって、神は我々を驚かす。このような不思議さのなかで、神は、決して衰えることのない近さ (nearness) を宣言するのだ。」⁸⁸

<神><神々>そして<近さ>という、後期 Heidegger の^{おはこ}十八番とも言うべき言葉が列挙され、同時に本論で焦点をあてている Wordsworth と Rilke の詩的営みの本質を言い当てている的確な言葉であるが、今は、心像 (詩的イメージ) が、詩のなかで生成しつつ、やすらっている在り方を確認しておけば事足りるだろう。

上の<水仙>の一節にもう一度戻って、それらが誕生した現場を点検しておきたい。詩が生成し、<素朴なもの>が煌めくには、その場の雰囲気のようなものが前提としてあるのだ、ということで、それはある。<水仙>は、<夏の日に><孤独で><密やかに>咲くのであり、<ハンニチバナ>は<楓の下>で煌めいている・・・この状況は Heidegger の言う、その土地が醸し出す「根本的情緒 (Grundstimmung)」という雰囲気的空間の謂いである。この雰囲気が詩人の心にまでも達して、世界と私両方を静かに染め上げる、このような雰囲気のなかで、真の<水仙>も誕生するに違いないのだ。それは、俳句の世界

⁸⁸ PLT, 226

で、＜わび＞とか＜さび＞とかいった雰囲気のことであり、現実の可視の世界のやや向う側にあるかと思えば、幾分手前にあるような、不可視の世界（＜大地＞）のこと、要するに＜もの＞＝＜存在者＞は、そのような不可視の世界（＜存在＞）に背後から覆われ支えられながら、それだけではなくそれに浸透され、それに主体的に浸透しながら、生成してくるのだ。

今検証している Heidegger の思索＝詩作は、更に次の2節が付加されていて、＜ものの救済＞を果たすべき、人間＝詩人の、その際の実存的な心理状態も述べられている。ものが大地のなかに建設されるのは、人間の側の＜悲哀＞と＜苦悩＞であるところ語られている。

Wen könnte, solange er die Traurichkeit meiden will,
je die Ermunterung durchwehen?

もし 我らが 悲哀を避けようと望むなら
快活さは いつ 我らを貫き流れることができようか？

Der Schmerz verschenkt seine Heilkraft dort, wo
wir sie nicht vermuten.

シユメルツ 苦悩は いや 癒す力を 与えてくれる
我らが それを少しも望まないところで。

この＜悲哀＞と＜苦悩＞と言う語も、Heidegger が詩人たちの解説を果たす中で、常に彼の心の中に浮上してくる言葉であるが、Heidegger のみならず、Wordsworth にも Rilke にも共通した心性であることは間違いない。或いは、苦行に明け暮れた我が芭蕉でも西行でもいいだろう。最後に、それらが「癒す力を与えてくれる」のは、「それ（＝癒し）を少しも望まないところで」と彼は断っている。Wordsworth ならば、＜賢明な受動（wise passiveness）＞と呼ぶであろう事態のことで、それはあり、Rilke→Heidegger が＜待つこと（waiting）

>として説明する事態のこと、真理がその本質を<空け明け (Lichtung)>する時空のことであるだろう。

『マルテの手記』の最後で、主人公マルテ = Rilke の分身は、<放蕩息子>として懐かしい故郷に帰郷するのであるが、満たされることはない。また、<帰郷>する Hölderlin に<故郷>は常に憂いを突き付けるのであった。詩人たちにとって<故郷>とは、常に既に<異郷>と化すものであり、湖水地方に帰省した Wordsworth は、有頂天になるのもつかの間、同胞人たちの振舞いに、悲しい衝撃を受ける。私自身との不一致、共同体との不一致、そのような<苦悩>の中から、<癒し>というものを「少しも望まないところで」、詩というものは生成するのだ。

.....

本論を結ぶにあたって、我が俳句の世界を熱いまなざしで見届ける Octavia Paz から、もう一度引用しておきたい。恐らく、Wordsworth, Rilke をはじめ、あらゆる<自然>詩人に共通した感性と営みを言い当てている筈だ。

樹木の一本一本が、我々の知らない言語を話す・・・海のリズムは我々の血のリズムと調和を合わせ、石の沈黙はまさしくわれわれの沈黙であり、砂漠を歩くことは、それと同じく無限である我々の意識の広がりの中を行くことであり、そして森のざわめきすらわれわれのことを話題にしているのである。われわれはすべて、全体の一部となる。存在が虚無から姿を現す。同じリズムがわれわれを動かし、同じ沈黙がわれわれを取り囲む。日本の俳人蕪村が見事に表現しているように、事物自体が生気を帯びてくる。

白蓮を切らんとぞおもふ僧のさま

この瞬間は存在の和合を啓示する。すべてが静止し、すべてが動いている。死とは、何か遊離したものではない—表現しがたい微妙なあり方において、生なのである。われわれの虚無性の啓示は、われわれの存在の創造へと導

く。無に向けて投げ出された人間は、それに直面して、自らを創造するのである⁸⁹。

＜参考文献＞

- Bate, Jonathan. *The Song of the Earth* (Picador, 2000)
Becker-Leckrone, Megan. *Julia Kristeva and Literary Theory* (Palgrave, 2005)
Benjamin, Walter. *One-Way Street* (Verso, 1978)
Brickle, Peter. *Heimat: A Critical Theory of the German Idea of Homeland* (Camden House, 2002)
Detsch, Richard. *Rilke's Connections to Nietzsche* (University Press of America, 2003)
Eliot, T. S., *Collected Poems 1909-1962* (Faber and Faber, 1963)
Eliot, T. S., *The Use of Poetry and Use of Criticism: Studies in the Relation of Criticism to Poetry in England* (Faber and Faber, 1986)
Foucault, Michael. *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences* (A Translation of *Le Mots et les Choses*). (Vintage Books, 1973)
Hartman, Geoffrey H., *The Unremarkable Wordsworth* (Methuen, 1987)
Heaney, Seamus. *Preoccupations: Selected Prose 1968-1978* (Faber and Faber, 1980)
Heidegger, Martin. *Vorträge und Aufsätze* (Neske, 1984)
Heidegger, Martin. *Aus der Erfahrung des Denkens* (Vittorio Klostermann, 1983)
Heidgger, Martin. *The Question Concerning Technology and Other Essays*, translated by William Lovitt (Harper, 1977) [略 QCT]
Heidegger, Martin. *On the Way to Language*, translated by Peter D. Hertz (Harper, 1982) [略 WL]
Heidegger, Martin. *Poetry, Language, Thought*, translated by Albert Hofstadter (Harper, 1975) [略 PLT]
Hirsch, Jr. E. D. *Wordsworth and Schelling: A Typological Study of Romanticism* (Archon Books, 1971)
Howe, Lawrence W., "Heidegger's Discussion of 'the thing': A Theme for Deep Ecology", *Between the Species*, 1993
Keats, John. *The Letters of John Keats* in two volumes, edited by H. E. Rollins (Harvard U. P., 1958)
Levinson, Michael (ed.). *The Cambridge Companion to Modernism* (Cambridge U. P., 1999)
McAfee, Noëlle. *Julia Kristeva* (Routledge Critical Thinkers) (Routledge, 2004)
Nichols, Ashton. *The Poetics of Epiphany: Nineteenth-Century Origins of the Modern Literary Moment* (Alabama U. P., 1987)

⁸⁹ Octavia Paz 『弓と豎琴』 259-60

- Pater, Walter. *Selected Writings of Walter Pater*, edited by Harold Bloom (Columbia U. P., 1974)
- Prickett, Stephen. *Wordsworth and Coleridge: "The Lyrical Ballads"* (Edward Arnold, 1975)
- Rigby, Kate. *Topographies of the Sacred: The Poetics of Place in European Romanticism*, (Virginia U. P., 2004)
- Rilke, Rainer Maria. *Ahead of All Partings: The Selected Poetry and Prose of Rainer Maria Rilke* (A German-English Parallel Text) edited and translated by Stephen Mitchell (The Modern Library, 1995) [略AAP]
- Rilke, Rainer Maria. *Duino Elegies* (The German Text, with an English translation), edited by J.B.Leishman and Stephen Spender (The Hogarth Press, 1975)
- Sandford, John. *Landscape and Landscape Imagery of R. M. Rilke* (University of London, 1980)
- Taylor, Charles. *Sources of the Self: The Making of the Modern Mind* (Harvard U. P. 1989)
- Thompson, Ian. *The English Lakes: A History* (Bloomsbury, 2010)
- Wordsworth, William. *The Oxford Authors: William Wordsworth* edited by Stephen Gill (Oxford U.P., 1984)
- Wordsworth, William. *Wordsworth: Poetical Works* edited by De Selincourt (Oxford U. P. 1966)
- Wordsworth, William. *William Wordsworth: The Poems*, Volume One (Penguin Books, 1977)
- Wordsworth, William. *Wordsworth's Literary Criticism*, edited by W.J.B.Owen (Routledge, 1974)
- Wordsworth, William. *The Illustrated Wordsworth's Guide to the Lakes*, edited by Peter Bicknell (Webb and Bower, 1984)
- Wordsworth, William. *The Prelude 1799, 1805, 1850*, edited by Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams and Stephen Gill (A Norton Critical Edition: Norton, 1979)
- Young, Julian. *Heidegger's Philosophy of Art* (Cambridge U. P., 2004)
- Young, Julian. *Heidegger's Later Philosophy* (Cambridge U. P., 2002)

- 浅井 真男『ドゥイーノ悲歌』(筑摩叢書：筑摩書房、1978)
- 生野幸吉／檜山哲彦(編)『ドイツ名詩選』(岩波文庫：岩波書店、2004)
- 上田 閑照『哲学コレクション：言葉』(岩波現代文庫：岩波書店、2008)
- 大峯 顕「聖と俗」『新岩波講座 哲学 13 超越と創造』(岩波書店、1998)
- オットー, ルドルフ／久松英二(訳)『聖なるもの』(岩波文庫：岩波書店、2010)
- 古東 哲明『＜在る＞ことの不思議』(勁草書房、1995)
- 小林 康夫『表象の光学』(未来社、2003)
- 高橋 英夫『ミクロコスモス — 松尾芭蕉に向かって』(講談社学術文庫、講談社 1992)
- 塚越 敏『創造の瞬間—リルケとブルースト』(みすず書房、2000)

- 辻 邦夫『薔薇の沈黙—リルケ論の試み—』(筑摩書房、2000)
外山滋比古『著作集1：修辞的残像』(みすず書房、2002)
西川 直子『クリステヴァーポリロゴス (現代思想の冒険者たち 30)』(講談社、1997)
創文社版『ハイデガー全集』(下記、訳者と出版年代は省略)
第4巻『ヘルダーリン詩作の解明』
第5巻『袖道』
第8巻『思惟とは何の謂いか』
第9巻『道標』
第12巻『言葉への途上』
第13巻『思惟の経験から』
第79巻『プレーメン講演とフライブルク講演』
パス、オクタヴィア/牛島信明(訳)『弓と豎琴』(岩波文庫：岩波書店、2011)
フロイト、シグムント/中山 元(訳)『幻想の未来/文化への不満』(光文社古典新訳文庫、2007)
ベーム、ゴットフリート/岩城見一、実淵洋次(訳)『ポール・セザンヌ：＜サント・ヴィクトワール山＞』(三元社、2007)
バルク、オギュスタン/篠田勝英(訳)『地球と存在の哲学—環境理論を越えて—』(ちくま新書：筑摩書房、1996)
ヘルダーリン、フリードリッヒ/手塚富雄、浅井真男(訳)『ヘルダーリン全集＜3＞：ヒューリオン・エンペドクレス』(河出書房新社、1973)
星野慎一/小磯仁『人と思想：リルケ』(清水書院、2001)
ホフマンスタール、フーゲーフォン/檜山哲彦(訳)『チャンドス卿の手紙(他十篇)』(岩波文庫：岩波書店、1991)
斧谷彌守『言葉の二十世紀—ハイデガー言語論の視角から—』(ちくま学芸文庫：筑摩書房、2001)
向井去来『去来抄・三冊子・旅寝論』(岩波文庫：岩波書店、1993)
メルロ＝ポンティ、モーリス「自然の観念」『メルロ＝ポンティ・コレクション』(ちくま学芸文庫：筑摩書房、2000)
横川 雄二「視覚と風景の変容」『Sentimental, Gothic, Romantic —十八世紀後半の英文学とエビステーマー』(英宝社、1997)
リルケ/望月市恵(訳)『マルテの手記』(岩波文庫：岩波書店、1997)
リルケ/塚越敏、後藤信幸(訳)『リルケ書簡集III—ミラノの手紙—』(国文社、1977)

.....

[最後に：研究余滴]

＜住むこと＞—このタイトルを、この3月上旬に課題として私自身に課した時に、東日本大震災及び福島原発事故が発生した。多くの人々を失い、今なお、多くの人々が苦しんでおられる。こともあろうに、本論のテーマであるところ

の、〈住むべき土地〉や〈耕すべき農地〉を失い、「〈故郷〉ごとそっくりさらわれてしまった」(あるラジオ番組から) 罹災された人々にとっては、仮にこの論考を読まれたとしたら、空疎な白々しい文章と受け止められるのは必定であろう。

Heidegger という哲学者のそもそもの思索の原点には、〈存在 (Sein)〉は眼前の〈存在者 (Seiendes)〉があつてこそ、立ち現われてくる (つまり、眼前の〈花〉が存在してこそ、〈花 - 性〉が顕現するというわけだ)、そして、同じ現象学哲学者の Merleau-Ponty にとっては、私と〈世界〉は同じ〈生地 (texture)〉で織られているというものであったが、その〈存在者〉も〈世界〉も消失してしまえば、彼らの (そして私たちの) 生存の意味や哲学の営みは根底から揺さぶられてしまう、つまり私たちは〈根無し草〉になってしまうばかりだ。本論での言い方を用いれば、〈もの〉と〈言葉〉の蜜月関係への志向は、つねにすでに破断になっている、そのような事態なのだ。〈もの〉を〈言葉〉で言い当てるまえに、すでに〈もの〉の方が消失してしまっている。

こういった時には、ひょっとしたら〈沈黙〉してその中で耐え抜くことこそが最高度の人間的姿勢であるかもしれない。我が詩人谷川俊太郎氏は、その時に出回った仰々しい言葉の氾濫の事実直面し、言葉にすれば何かを言い当てるかもしれないが、それ以上に、言葉にすれば、何か重要な、大きなものを背後に置き去りにする、という〈言葉の危険性 (Hölderlin → Heidegger)〉を熟知されながら、詩人としての義務を果たすべく、次のような詩作をものにされている。

言葉

何もかも失って
言葉までうしなつたが
言葉は壊れなかつた
流されなかつた
途切れがちな意味

言葉は発芽する
がれ^き瓦礫の下の大地から
昔ながらの訛^{なま}り
走り書きの文字
ひとりひとりの心の底で

言い古された言葉が
苦しむゆえに甦^{よみが}る
哀しみゆえに深まる
新たな意味へと
沈黙に裏打ちされて

(『朝日新聞』2011.5.2 夕刊)

この谷川氏の苦渋に満ちた＜沈黙＞から絞り出される言葉、＜沈黙に裏打ちされた言葉＞、それは commercial TV その他のメディアにおける幾多の、時には空虚な、言辞を集めてもそれでも足りない、多くのことを語っている筈だ。そしてこのような詩こそが、生きる勇気を恐らく与えてくれる。＜沈黙＞の背後で何かがざわめきながら、響きをたてている。この氏のざわめく＜沈黙＞こそ、同時に本論の undertone にもなっている。

Heidegger は、後期の著作のなかでは決まって、沈黙どころではなく、饒舌過ぎるまでに、＜宇宙飛行＞と＜原子爆弾＞、そして薄っぺらな＜情報言語＞こそが、＜総駆り立て体制 (Gestell)＞でもって人間を拘束し、そして人間に＜大地＞を失わせる、現代テクノロジーの＜厄病神＞という診断を下し、警告を発し続けていたのである。にもかかわらず、それらの＜厄病神＞は、例えば、この国の教育界をも大手を振って席卷している有り様だ。21世紀を生きる現代の私たちは彼に耳を傾けてきたのだろうか。その Heidegger 自身は、危機的な状況下では、例えば「Hölderlin など詩人たちの語りに耳を傾けなさい」と勧めているのだけれど、本論での私の試みはその Heidegger に耳を傾け、その彼を通して詩人たちの言うことに耳を傾ける試みの一つに過ぎない。＜今＞＜ここ＞で、＜小さな事物＞の中に潜む＜静寂 (= 沈黙) の響き＞に耳を傾けながら。

・・・同時に、マスメディアの表層的な言辞の背後に隠され、視界から閉却された形の、それでいて今なお（或いは今後長い歳月に渡って）救済と復興のために、自分の身体と生命を犠牲にしてまで精力的な活動を行っておられる、（ボランティアを含めた）実践的な活動家の人々に跪拝しつつ、静かにエールを送りたい。そして今は、冒頭で引用した Hölderlin の言葉―「心がじっと忍んで傷心の夜を耐え抜いたとき、一つの<新しい浄福>が開けてくる。」という、その言葉を信じるばかりだ。